
学園黙示録 ~ Fallout OF THE DEAD ~

パズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 Fall out OF THE DEAD

【Nコード】

N7503N

【作者名】

パス

【あらすじ】

最近よく見かける学園黙示録の二次創作です。初小説で練習作なのでご意見、ご感想をお待ちしております。

1（前書き）

どうもパズと申します。初心者です。駄文ですが読んで頂けると幸いです。

人は過ちを繰り返す。

我々の祖先が地球に生を受け、武器を手に入れた時から争いは繰り返されてきた。時に神の名の元に、時に正義の名の元に、またある時は狂気の名の元に。

2077年 永きに渡って続いていた人類の争いは一つの終幕をむかえた。

G r e a t W a r .

大いなる戦争と称され地球を切り裂くような全面核戦争に発展したのだ。

核爆発と放射能により世界は灰に沈みほとんどの人間が死に絶えた。しかし、それは人類の歴史の終わりではなく次なる血塗られた歴史の始まりに過ぎなかった。

世界と文明が破壊し尽くされようと人は過ちを繰り返す。死を恐れた避難民たちはVaultと呼ばれる巨大地下シェルターに身を寄せた。そして彼等の一部は地上へ戻り街を作りやり直そうとした。だが世界は冷酷で残酷だった。

人間と言う種を見捨てたかの様に起きる突然変異。放射能で汚染された蟻や鼠、熊に蠍等が巨大化して襲ってくる。

それでも人々は戦い生き続けた。

そして核投下から二百年後　2277年。父の足跡を追う為大破したワシントンDC　キャピタル・ウエイストランドのシエルタ「Vault101」を飛び出した一人の旅人がいた。荒れた大地と荒んだ心が支配している不毛の地で多くの人が悪に屈していくなかで旅人は戦い続けた。

キャピタル・ウエイストランド。

ここは危険に満ち溢れている。

例えばスーパードミュータントと呼ばれる人類の敵。

奴等は人を拐い喰い尽くす。

レイダーと呼ばれる狂人集団。

奴等は奪い犯し殺して飾る。

更に放射能による突然変異で禍々しくなった動物や虫。

汚染された水や食料も生きる為に飲食せざるをえない。

そんな狂った世界でも旅人は出来る事をやり続けた。

そんな旅人を人々はいつしかVault101の英雄やウエイストランドの救世主と呼ぶ様になったが、その名声を妬む者や邪魔と思う者たちからは指名手配されてしまう。

旅人は傭兵にまでも命を狙われる。

それでも旅人は父の教えを継ぎ自分に恥じない様に生きた。

そして旅人は父に再会した。

父親の目的　それは水の浄化だった。

一時は息子の為に未来へと背を向けてVaultに入った父だった

が浄化プロジェクトを成し遂げる為にVaultを脱出したのだ。
旅人は父のプロジェクトに参加をし始めた。

しかし不測の事態が発生してしまう。

実験中にアメリカ政府を自称するエンクレイブが襲撃をしてきたのだ。

目的は浄化プロジェクトの奪取と施設の占拠。

父は浄化プロジェクトを守る為、人類の明日の為にエンクレイブの指揮官を道連れにコントロールチャンバーを高放射能で満たし死んだ。

旅人は確かに父親の志を継いだ。旅人は様々な人々の力を借りてエンクレイブと戦い、浄化施設から敵を排除し浄化プロジェクトを取り戻した。

そして永い旅の果てに旅人が辿り着いた答え。

勇気の持つ真の意味。

それは犠牲。

己の身を汚染されたコントロールチャンバーに投じ、かつて父がそうした様に人類の明日の為にその身を捧げた。

そしてキャピタル・ウェイストランドに浄化された水が流れ始めた。全ての人類の為に誰にも奪われる事のない美しい水が不毛の大地を救ったのだ。

Vault101を飛び出した旅人の一つの旅が今終わり、歴史に綴られる。

ここでキャピタル・ウェイストランドでの彼の旅は終わる。

しかし彼の旅は終わらない。舞台を替えて彼の旅は再び始まる

「What am i doing here for?」

独り言の様に言う黒髪のくせっ毛に少し三白眼の男の子で明らかにアジア系の顔立ちをしてる。

青いジャンプスーツを着て左腕にPip Boy 3000と呼ばれる高機能情報端末を付けた彼は以前Vault 101の英雄と呼ばれ放射能で汚染されたコントロールチャンバーで死んだはずだった。

気がついたら異世界だった。

陳腐だと思うが目が覚めたら知らない部屋のベットでしかも美味しい飯に綺麗な水まで無償でくれたのだ。

確実に異世界、しかも天国ときた。

だが大きな問題がある。言葉が通じないのだ。Vaultでの資料で見た昔の日本と言う国に似ている。だが日本も荒廃し尽くしているはずだ。

「Excuse me, where am i?」と飯と水を持ってきてくれた女の人に聞くと困った様な顔して片言の英語で教えてくれた。

理解出来た単語にgrow up homeと言っていた事から孤児

院だろう。キャピタル・ウェイストランドには孤児院なんてものはなかったし俺も昔そんな施設がありました程度にしか知らない。当然名前も尋ねられたがわからないで通した。悲しい事に賞金首だった時の癖がでてしまった。

それに名前……なんだっけ？

旅をしていて一度も名前呼ばれてないからなあ。そんな俺だがこの孤児院で暮らしていいそうだ。

それから警察という所に連れてかれた。

そこで漸くまともに会話ができる人に会えた。

曰く、今は1999年で戦争も無く平和な国らしい。

約280年前の世界、武器や防具も必要ない世界。

放射能による汚染や突然変異もない。

ウェイストランド人にとっては……いや、あの世界の者にとっては理想郷だ。

夢の様な世界とっていい。

だがなぜだろう……嬉しさより悲しさと虚しさが溢れてくる。

あんな糞つたれな世界でも自分の故郷なんだ、良い思い出は少ないが親父や仲間達が居た。

なんだかんだで俺はキャピタル・ウェイストランドに愛着を持っていたらしい。

警察官に名前や住んでいた所を訊かれたが全てわからないで濁し事無きをえた。

そうしたら病院に連れてかれ晴れて記憶喪失患者とされ飯の戸籍を手に入れた。

今の自分の年齢は推定6歳程度、P i p B o y 3 0 0 0 は玩具と思われたのか調べられなかった。

全ての作業が終わり孤児院に向かう帰路。

あの世界では見れない美しい夕陽の中。

綺麗な舗装路と住宅を見ながら、ウェイストランドの荒廃した世界を思い出し少しだけ目の前が滲んだ。

それから四年の月日が過ぎた。

最初の二年間で日本語の勉強し読むのと喋る事は出来る様になってきている。

帰る方法を考えようとも思ってたけれどあの世界で成すべきことは成し遂げた。

それに俺がこの世界から帰れたとしたら向こうの世界も黙っていない。

確実に面倒な事になる。

何故なら帰るという事は向こうの世界と繋がるからだ。

あの世界の全てがこちらに来ようとするだろう、確実に戦争になる。

この国の言葉で言えば故郷は遠くに在りて思うもの。

俺はこの郷愁と共に生きていく。

この世界で。

他にもこの世界の常識を多少覚えた。キャピタル・ウェイストランドには法律などはない。むしろ国家がないのだ。

安全とは武器の元に……力の元にしかない。

そう、自分を自分の代わりに誰かが守ってくれるなんて冗談にしか聞こえない。

さらには武器の所持まで禁止されている。ウェイストランド人の俺にとってこれはものすごく不安だ。

後は人の多さに辟易した。

ウェイストランドの何千、何万倍と人がいるのだ。たった一日でウェイストランドで会った人々より多くの人を見たときは感動したが

さすがにもうつんざりだ。

孤児院や学校では常に無愛想、無口、無愛嬌で過ごしていた。と言うよりもこの世界のガキ共とは感性が合わないというか、気に食わない。

頭の中がお花畑の人間とは関わりなくなかった。我ながら捻くれていると思うがこればかりは性分だ、矯正しようがない。

そんな俺を引き取ってくれる夫婦がいるらしい。

俺はその申し出を一も二もなく飛びついた。

孤児では遠出も出来ない上に門限も決まっている。

更に何故かガキの引率を俺がしなければならぬのだ。

ならばどこかの養子になった方がいい。

そう決断し了承の旨を伝えた。

こうして二度目の十歳の誕生日、俺が前の世界で P i p B o y
3000を貰った日。

俺は「小室」の姓を貰い晴れて小室孝となったのだ。

とある孤児院職員の手記

平成十一年八月十二日

今日、新しい子が来た。

孤児院の前で倒れていた変な服を着た男の子。

英語しか喋れない上に記憶喪失との事。

名前は孝と言うらしい。

他の子と上手くやれるか不安だがなんとかフォローしよう。

平成十一年十二月十日

久しぶりに筆を取った。前に書いた男の子、とんでもない問題児だった。

この前なんて徒歩で四つの県を歩き通して警察に捕まり電話がかかってきた。

本人はけろっとしていたが私達は警察に届けを出したり探し回ったりと大変だった。

疲れた。

この辺で筆を置こう。

平成十二年四月十八日

遂にあの大問題児が学校に行く事になった。

私はこの孤児院に勤めてあれほどの問題児を見た事がない。

圧力釜とパチンコの玉でクレイモア地雷を作ろうとしたり竹と火薬で火槍を作ったりと子供のイタズラってレベルじゃない。

今日も私は神に祈る。

明日も床主に平和あれ。

平成十二年十二月二十五日

ああ、神よ。

いつの間にか手記の筈があの子の奇行の記録になってきている。
しかし書かずにはいられない。

主に私の精神安定の為に。

今日は厳かに降誕祭を行う……筈だった。

孝君に鶏肉が足りないから買ってきてと頼んだ。

しかし彼は予想外の行動にでた。

孝君が農場に行った時に貰ってきた鶏。

それを庭で捌いたのだ。

血抜きまでパーフェクトだった。

だけど、それを見ていた子供達が鶏肉を見ない様に食事していた。

勿論、皆が残した鶏肉は孝君と私で平らげた。

正直、吐きそう。

彼は無愛想だが言った事はしっかりやってくれる。

時折、やる事が斜め上にぶっ飛んでいるが。

平成十三年八月七日

孝君が日本語の読みと聞き取りと話すことができるようになった。

彼は頭が良いのだけど……

昨日は裏の林に蜂が巣を作っていたので役所に駆除を頼んだ。

危ないので近づいてはいけなとしっかり伝えたが、確かに伝えた

が役所の人が中々来ない事に痺れを切らした人が居た。
そう、孝君だ。

殺虫スプレーとライターを組み合わせで即席火炎放射器を作り蜂の
巣を焼き尽くした。

何でこんな事をするの！と叱って晩御飯抜きに処した。
子供達が真似しないのが唯一の救いか。

平成十四年五月二十日

前回の日付から随分たった。

それは毎日が平穏であつたからだ。

孝君は畑を作ったりと幾分静かにしていた。
世にいう嵐の前の静けさだった。

畑は第一段階に過ぎなかった。彼の真の目的は養蜂だった。
前回、怒られたのは役に立つ虫を殺したからと勘違いをして裏山の
一画を畑にして更に養蜂まで始めたのだ。

私には彼の矯正は無理だろう。

とりあえず旬の新鮮な野菜が食べれる様になった。
ポジティブに考えよう。

平成十五年一月一日

皆で神社に初詣しに行った。

ついでに絵馬を渡して願掛けしてもらった。

皆が書いた絵馬は、今年も元気でいられますようにとか成せきがよ
くなりますようにとか 核戦争が始まりませんように……とか。
神様、どうか彼がまともになりますように。

平成十五年五月三十日

また孝君がいなくなった。

警察に届けを出す時などいつもの言うだけでわかってくれる。
とりあえず近所を探してみた。

途中、女の人に尋ねたりしてみたがみつからなかった。

彼女は御別小学校の教師をしてるらしい。

孝君は床主小学校所属の為面識は無いだろう。

丁度いいので彼の事で色々相談してみた。

彼女には悪いが愚痴を吐いたらすすきりした。

さあ、明日もがんばろう。

平成十五年八月十二日

孝君が来てからもう四年。

なんと彼に養子縁組みの話が来た。

相手は私が二ヶ月程前に知り合った御別小学校の教師。

彼女が夫に相談した結果、彼を引き取る事に決めたらしい。

孝君も乗り気の様だしこれで決まったかな。

いくら問題児といっても別れるのは悲しい。

彼に神の御加護がありますように。

2 (前書き)

説明文多いorz

文才の足りない駄文ですが読んで頂けたら幸いです。

小室家。

それは小学校の教師の母とサラリーマンの父、それに元孤児の息子。その三人で形成されている核家族である。

父は出張が多く家にあまり居ない。母は教職に就いている為ほぼ毎日学校でも家でも一緒だ。

息子は学校では大抵独りで本を読むなり玩具をいじったりして過ごしている。

どこか大人びている息子を母と父は怪しがる事無く溺愛していた。何故ならば彼が何であるかと、彼は母と父の息子なのだから。

小室家に養子に入って七年がたった。

時間は偉大だ。最初はおじさん、おばさんと呼んでいたが一年もたったら普通に父さん、母さんと呼んでいた。

当初疑問だった、何故自分を引き取ったのか聞いてみたがなんでも昔流産してしまいその子には孝と名付ける筈だったらしい。

奇しくも俺と同じ名前だった事で運命的なものを感じたとのこと。

そして俺をどこで知ったのかという孤児院のお姉さん（ババアとかおばさんとか言う）と飯ヌキ、トイレ掃除、寝床が赤ん坊の横になるという特別仕様になる）が、ふらりと居なくなった俺を必死に探してる時に仕事が終わって帰宅中のお袋に俺の事を訊ねたのが始まりとの事。

ちなみに俺の孝っていう名前は適当に警察の人に漢字を指差したら

孝って字だった。それだけだ。

閑話休題。

なんとも物足りないが小学生、中学生、高校生と順調に進む。左手に付けているPip Boy 3000も外してしまった。とはいってもポケットに常に入れているが。

Pip Boy 3000。

武器（WEAPONS）に弾薬（AMMO）、防具（APPAREL）、薬や食料（AID）、拳句の果てには雑多アイテム（MISC）まで収納でき、更に己の状態や特性、SKILLSの習熟度にPERKSと呼ばれる特殊アビリティの確認ができる。

SKILLSとはBig GunsやLockpick等13個存在する。

要するに話術や開錠技術に銃の扱い、医療技術等々の習熟度である。そしてPERKS。

いわば特殊アビリティ。

素手での戦闘が強くなるIron Fistに、持ち運べる装備の量が増えるStrong Back等がある。

何故Pip Boy 3000にこの様な機能がついているのか。

答えは簡単、軍用だからだ。

元々Vaultは避難用地下シエルターと名のついた人体実験の場

所なのだ。

それぞれテーマがありそれに沿った実験を繰り返す。

あるところはクローンを、またあるところは人を進化させようとした。

Vault 101、俺のいたVaultのテーマは純粹。

おかげで俺は特に実験される事も無く日々を遅れた。

とはいっても毎日がトレーニングの日々だった。つまりVault 101は薬や改造を一切しないでどこまで強くなれるかを調べる所である。

Pip Boy 3000はその補助として使われていた。

そして更にレベル機能がある。

これはPip Boy 3000が神経に繋がっている事を利用して敵を倒した高揚感や目的を達成した時の達成感を数値化する。

それが一定以上貯まるとレベルが上がるという仕様だ。

レベルが上がるとSKILLSの習熟度が上がりPERKSを取得できる。

これは頭と言うより脳に知識を刻み込み身体を変化させる。

上限が20でレベルが1～5がRookieで6～10がVeteran、11～15がProfessional、16～20がLegendと分けられる。

Vaultで五十年暮らしてもレベルは3程度にしかない。

しかしVaultから出たら早ければ数日で5以上になる。

生きる為にはVeteran程にはならないとあつという間に地面とキスしてさようならだ。だがレベル10以上のVault出身者は稀有である。

大抵の者は死ぬからだ。

戦ってレベルが上がって戦いに必要なものを頭に刻みこんだとしても本当に必要なものはそんなものではない。もっと根本的なナニ力が必要なのだ

PERKSもSKILLSもあつたら便利程度のものだ。

つまりレベルは強さの目安にはなりえない。レベルが高いから強いんじゃない。強いからレベルが高いのだ。

俺も死ぬ前？にはレベル19までいった。だが、何故かこの世界に来てからレベルが1に戻っているのだ。

つまりPERKSが全く無い。

更に収納機能が使えない。

いや、入れる事は出来るがMISC以外出せない。

最近は筆箱がわりにしか使ってないが。まあ、今まで必要とした事も無いしS・P・E・C・I・A・Lは異様に高いから問題も起こらなかった。

STRENGTH（筋力）

PERCEPTION（知覚）

ENDURANCE（持久力）

カリスマ

CHARISMA

INTELLIGENCE（知性）

AGILITY（敏捷性）

LUCK（運）

これらを総じてS・P・E・C・I・A・Lと呼ぶ。

S・P・E・C・I・A・Lは1～10で表される。

この世界の一般人は大体ALL4程だろうか。

ちなみにキャピタル・ウェイストランドの人は最低でもALL5はなければ生きてはいけない。

と、まあこんな話はどうでもいい。

昨日は夜更かししたから眠くてしょうがない。

こんなにいい天気の日天文台で寝るに限る。

麗らかな昼下がりに平和な日常の一端。生徒も教師も日常を謳歌していた。

この時まででは。

『全校生徒・職員に連絡します！全校生徒・職員に連絡します！現在、校内で暴力事件が発生中です。生徒は職員の誘導に従って直ちに避難してください！！』

校内に流れるアナウンス、それを聴きざわつく生徒達。
しかし次の瞬間

『繰り返します、現在校内で『ブッ』ギヤアアアアアッ！！あつ助けてくれつ止めてくれたすけっひいつ痛い痛い痛い！！助けてっ死ぬっぐわあああ！！』

狂気に変わった。

我先にと生徒と教師が駆け出していく。
人を踏みつけ前にいる人を殴り飛ばす。
そんな中、理性的に行動した者がいる。

「ねえ、永！早く逃げないと！」

「落ち着くんだ、麗。教室棟は駄目だ。管理棟から逃げよう」

彼、たれ目のイケメン井豪永とその彼女の二本のアホ毛がトレードマークの宮本麗。

彼らは他の生徒よりも現状を理解していた。
即ち丸腰では危ない、と言う事だ。

「ほら、麗。受けとれ」

「うん…永は？」

「俺は一応このバットを持っていく」

掃除用具のロッカーからモップを取り出し先端を外し即席の槍にして麗に渡す永。

永は置いてあったスポーツバックから金属バットを取り管理棟へ向けて走り出す。だが管理棟へ向かう途中は現れた。

「あれって……現国の脇坂？」

「まさか、邪魔するつもり……避ける!!」

麗の方に寄っていく《それ》。

脇坂と呼ばれた《それ》は大腿部を喰い千切られ白目を剥き口があり得ない程開き歯茎まで見える。

「なっやだっ近寄らないで!!」

「こつちだ!こつちに来い!脇坂ア!麗!遠慮するな!」

「槍術部を……なめるなあ!!」

見事な突き、人間なら確実に死ぬ心臓への一突き。

だが《それ》相手には悪手だった。モップの先端部が相手に刺さり動けなくなったのだ。

「し、心臓を刺したのに、な、なんで動けるのよ!!」

「麗ッ！今の内に引き抜けっ！」

永は《それ》を羽交い締めにした。バットを使わなかったのは彼の優しさか、それとも暴力に対する恐怖か、はたまた自分の腕を見誤っていたことか。どちらにしろ彼はバットを使わなかった。それが分水嶺だった。

「永っダメよ。そいつ普通じゃない!!」

「心配するな。こんな奴、俺が投げ飛ばして……」

槍を抜いた麗が心配する中^{それ}は恐るべき力で首を回す。

狙いはバットを持っている腕。ギリギリ、ジリジリと口を寄せていく。

「なっこ、こいつなんでこんなに力が!?!」

「永っ!!」

そして《それ》は遂に永の腕に噛み付いた。

「ぐっ!!……」

「このっ永から離れろ!!」

槍を刺されても噛み付いたままで傷口からは血が吹き出さない。まさしく死人。

「ぐっ……麗、バットだバットで頭を狙え！」

「う、うん！わかったわ！」

永が噛まれた際に落としたバットを拾い　縦に振り落とす。ぐしゃあという西瓜を割った時の音を何倍にも不愉快にした音が響き渡る。

その不協和音の元を見ずに麗は永の元へ駆けた。

「永！大丈夫！？」

「ちょっと肉を裂かれたただけだ。大した事ない。それよりも……」

周りの音に耳を傾ける二人。

聞こえてくるのは他のパニックになった生徒の末路。生の終わりの断末魔だ。

「あ、あんなの何人もいたら……」

「……屋上に出よう。救助が来るまで立てこもるんだ」

「屋上に立てこもるって一体どこに……」

「天文台……天文台だ！」

天文台に向かって走る彼等。

ドアを開けたその先、屋上にはまだ《それ》はいなかった。

そして街の至る所から煙が上がっていた。

「……道理で警察が来ないはずだ」

「なんなの、これ。一体なにが起こってるのよ!! っへり?」

バラバラバラと風を切るローター音が轟く。

「ブラックホークだ。アメリカ軍……違う自衛隊か」

「助けてーっ!!」

手を大きく振り大声で助けを求める麗。だが永が少し憔悴した声で答える。

「無駄だ」

「なんでよ!」

「自衛隊もここに来るまでに惨状を見ただろう。なのに救助作業をしていない。つまり特別な任務があるのさ。俺達を助けるとは思えない」

一度見えた希望が崩れ黙り込む二人。

BGMに校舎から校庭から断末魔が流れる。

それを振り払うかの様に喋る永

「病気の様な物なんだ。 奴ら に 」

「 奴ら ? 」

「映画やゲームじゃあるまいしゾンビと呼ぶわけにもいかないだろ。ともかく 奴ら さ。 奴ら は人を喰う。そして喰われた奴が死ぬと 奴ら になって蘇る。理由は分からないが頭を潰す以外に倒す方法は無い……」

「遂さつきまではいつも通りだったのに……」

「麗、とりあえず天文台に上って階段を塞ごう」

「うん……あれ、あそこ誰がいる？」

麗の指差した方向には暢気に鼾をかいて寝ている男が居た。

「あれは……同じクラスの小室だ！まさか寝てる……のか？」

そう彼は昼からずっとここで寝ていた。断末魔や絶叫も彼にとって
は子守唄にしかならなかったようだ。

寝ていた男を叩き起こしバリケードを張り一先ず彼等は安全を得た。

災害・恐怖が渦巻く環境で、人が冷静でいられる確率、およそ1%
程だ。

だが冷静でいられるから必ず助かるというわけでもない。

助かる為には能力が必要だ。運や勘だつて能力の内だ。
その勘がざわめく。コイツはもうダメだと、楽にしてやれとざわめく。

「OK・OK・つまりあれだ、ロメロの世界に早変わりしたわけか。
題名はHIGH SCHOOL OF THE DEADってところか」

「……端的に言えばそうなるな」

「ちょっと！小室君！水汲むの手伝ってよ！」

「黙ってる触角。あぁんと井豪だったか？噛まれたんだな？」

「……ああ……なぁ、頼みがあるんだ……ガフッ」

段々と弱くなっていく声。青くなっていく顔。血まで吐いた。
何度も……何度も見てきた。死ぬ奴、独特の顔。死相とでも呼べばいいのか。

この顔をしてる奴は死ぬ、久しぶりにみたが間違っ事はない。

「永……！どうしたの……！」

「静かにしろよ、触角。最後の言葉だ。心して聞こうか」

「ゴホッ……麗を、麗を頼む……そして俺を……俺である内に……殺してくれ」

血を吐き出し苦しそうに喋る井豪。だがその願いを否定して目を背ける触角女。

「う、嘘よ。永が死ぬわけない！！ちょっと噛まれただけなのよ！！」

もうコイツは助からない、何故なら俺が殺すからだ！

ヒヤッハー！汚物は消毒だ！

コイツの願いを叶えてやろう〔28%〕

失敗

「ダメ！絶対にダメよ！永は…永は特別なのよ！！ 奴ら なんかにならないわ！！」

「うげえっ！！」

そんな薄っぺらい言葉は今の井豪を見れば吹き飛ぶだろうに。
そう思えるくらい酷かった。顔のあらゆる穴から血が吹き出しているのだ。

「離れろ」

「ダメ！！永は……永は大丈夫なんだから！！」

そういつて掴み掛かってくる触角女。しかし井豪はもう動かない
筈だった。

「ほら！永が死ぬはずなんてない　永？」

ゆっくりと身を起こす井豪の脱け殻。白目を剥き口をあり得ない程開けている。

その様は正に　奴ら　そのものだった。

触覚女を引き離し拾ったバットを握る。前の世界でも初めて人を殺した武器はバットだった。何か運命的なものを感じる。

「悪いな。奴らになる前に殺せなくてさ。でももう一個の方の約束は守るよ」

「こんなのウソ、ウソよ……」

「現実は何時だって無情だ。バカバカしいがこれは確かに現実なんだ！！」

「いやああああつ！！」

上段に構えたバットを思い切り振り落とす。

俺の力とバットの硬度で頭は腐ったトマトの様に吹き飛ぶ。

「なんで、なんで！！」

「やらなければ俺もお前も喰われてた」

「私が……私は……助けて欲しくなかった！！永のこんな姿なんて見たくなかった！！こんな風にして生き残るぐらいなら永に噛まれて、私も　奴ら　になりたかったのに！！」

「それは困る。俺は約束したんだ」

「何が約束よ！！そんなの」

「俺はウソも吐くし約束も破る。だが死人との約束は絶対に守る。これは俺が俺である為の掟だ。」

「だったら！だったら 奴らを倒して来てよ！！」

「あんなあ」

「出来ないくせに！！所詮口だけでしょ！！」

「わかった。わかったよ。ちょっと叩いてくる」

「えっ？」

バットを持ちバリケードへ向かう。このバリケードは井豪の案でセロテープを巻き付けて補強してある。

それを剥がして机に登りバリケードの向こうへ行こうとしたその時

触角女が引き止めた

「やめてえっ！だめっ！だめえっ！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！！本気じゃないの！本気で言ったんじゃないの！！お願い、お願いだから一緒に、一緒にいて！！」

「STRENGTH」別にあの程度の敵なら余裕で殺せる。

一緒に？一緒にだって？寝言は寝て言うんだな、腐れビッチが！！

抱きしめる

夕陽に照らされた天文台で俺は触角女改め宮本を抱きしめた。

正直何故抱きしめたのかわからなかった。だが泣いてる女の子を泣き止ます話術など持っていない。

だからこの選択は正しい。そう正しいのだ。

世界が終わった日。俺はこの世界で初めて人を殺し女の子を抱きしめた。

〔VAULT DWELLER'S SURVIVAL GUID
E a p e r s o n v e r s i o n〕

小室孝AGE17

STRENGTH [8]

PERCEPTION [8]

ENDURANCE [8]

CHARISMA [3]

INTELLIGENCE	[7]
AGILITY	[8]
LUCK	[4]

Barter	[60]
Big Guns	[65]
Energy Weapons	[80]
Explosives	[72]
Lockpick	[92]
Medicine	[50]
Melee Weapons	[77]
Repair	[64]
Science	[81]
Small Guns	[83]
Sneaking	[94]
Speech	[39]
Unarmed	[44]

我らが主人公（笑）。基本的に能力は高いオールラウンダー。元の世界の親友は犬。好きな食べ物はモールラットの肉。あの腹の中で動く感じがいいらしい。

嫌いな食べ物はラッドローチの肉。えっあれ食べれるの？

とりあえず小室孝になってから人と接する事が減りカリスマブレイクした。

座右の銘は「圧倒的火力で平和的に決着」

宮本麗 AGE 18

STRENGTH[5]
 PERCEPTION[7]
 ENDURANCE[5]
 CHARISMA[4]
 INTELLIGENCE[5]
 AGILITY[6]
 LUCK[6]

Barter	[30]
Big Guns	[0]
Energy Weapons	[0]
Explosives	[0]
Lockpick	[0]
Medicine	[20]
Melee Weapons	[82]
Repair	[18]
Science	[10]
Small Guns	[15]
Sneaking	[67]
Speech	[50]
Unarmed	[26]

とりあえずヒロインその壱。人気は恐ろしく低い。
 だがそこがいい。ビッチ萌えの時代は遠い。
 PERCEPTIONが異様に高い。やはりあの二本の髪は触角な
 のだろうか。

3（前書き）

小説って難しい……

ただでさえクオリティの低い小説なのに更に酷い出来に……

しかし読んで頂き、ここは酷いとかこの文才カシイだろとか妄想乙などご意見、ご感想を貰えたらと思います。

駄文ですが読んで頂けると作者は泣いて喜びます。

彼等が屋上で安全を確保した頃。また別の場所で人は足掻いている。ここ工作室にも生きる為に必死にもがいている者がいた。

「こんな所に来てどうしようっていうんですか？確かに、武器になりそうなものはあるけど……その前に、情報得た方が」

「デブオタは黙ってなさい！！連中が入ってこないように扉を固定して！」

「鍵は閉めました！」

キツそうな顔立ちをしたツインテールの女、高城沙耶に穏和な印象の小太りの男、平野コータ。

この二人は例の放送が流れてきた時冷静にいの一番に教室を離脱し、おかげで人の流れに潰される事なく工作室まで移動できた。

その工作室の教壇に工具を広げる。

「ぶ、武器に使うんですか？」

「どうせアンタ、軍オタとか銃オタとかいう生命体でしょ？ならりーサルウェポン2って映画ぐらい観たことあるわよね？これ、なんだ分かる？」

そう言つて彼女が指差すそれは

「釘打器……そうか、ガス式か！」

「ったり前じゃない！！映画みたいなコンプレッサー式じゃ持ち歩

けないでしょ!!」

「映画、好きなんですか？」

「バカいつてんじゃないわよ！アタシは天才なんだからなんでもし
つて……!!」

廊下から聞こえてきた唸り声。

奴らだ。

「予備のボンベが一本。釘は……心配ないな」

「ナニ呑気なこと言ってるのよ！来てる！廊下に来てるわよ！」

「重さは4キロ位か、旧式のライフル並だな」

「ちょっとアンタ！聞いてんのっ」

「このままじゃ安定して構えられない。サイトも付けないと」

先程までの穏和な表情は消え失せ剣呑な表情で作業を続けるコータ。
だがしかし、時間は待つてはくれない。遂にドアが軋みはじめた。

「ひ……ひらの……」

奴らのドアを叩く音がドンドン大きくなっていく。

そして遂にドアが開き無数の奴らが入ってきた。

「い……いやあああっ！」

パシユ！

コータが釘打器を 手近にあった物で改造したそれはネイルガンと呼んだ方がいいかもしれない 奴ら に向かって放つ。放つ。

「そのドリルとか釘とかボンベとか適当な袋に積めておいてください。あ、工具箱も」

「なによアンタ、平野のクセにあたしに命令するっての！！」

「お願い……します」

ネイルガンを撃ちながらドコか気の抜けた表情で頼む平野。そのせいか沙耶も拍子抜けしたようだ。

「わ……分かったわよ」

そう言つてバックに荷物を詰め込む。もう彼女の頭の中では脱出のプランを組み立てていた。

「ほら、何してんの！あんたもこのバッグ、持ちなさいよ！」

「え？え？」

「逃げるのよ、ここから！」

保健室。病んだ者、怪我したものがくる場所。つまり 奴ら に噛まれた者が助けを求めてくる、一番死に近い場所。

そんな場所でも未だ生存者がいた。「困ったわあ……警察も消防も電話はつながらないし、手当てしても噛まれた人は絶対に死んじやうし、噛まれて死んだ人はリビングデッド化しちゃうし……まるでロメロの映画みたい」

この保健室の主、鞠川静香。級友だったモノを必死に殺す石井和樹。この二人だけが保健室の生存者だ。

「んな感心してる場合ですか！！逃げましょう、静香先生」

「ちょっとだけ待つて。持ち出せるだけ持ち出さないと……」

こんな状況でもマイペースに薬品を集める静香。

「なるべく急いでくださ……」

ピシッ

音の発生源は和樹の後ろの窓。そこに亀裂が走る。

彼が振り向いた時、無数の手に窓硝子は碎かれ廊下から無数の 奴

らが入ってくる。

「静香先生っ！」

彼は勇敢にも 奴ら に立ち向かう。

しかし彼にはこの局面を乗り越えるには如何せん能力が足りない。

彼は所謂平凡と言う言葉がよく似合う青年だ。そんな青年が 奴ら に対抗出来る筈もなく 噛み付かれた。

「ぐわああ！！先生！早く逃げて…」

「ああ……ああ。えーと。君、名前なんだっけ」

「は……こんな死にかたあんまりだああああっ」

和樹にたかってた 奴ら の内二体が新しい獲物の匂いを嗅ぎ付けたのか静香に迫ってくる。

「ひっ……ちよっ……ちよつとちよつと…」
ゴッ！

奴ら が静香に噛みつこうとした瞬間 奴ら の一体が崩れる。
続けざまに打ち込まれる連撃。

華麗にされど力強く打ち込まれていく。

数瞬後、気がつけば既に 奴ら は全滅していた。
そこに凜とした雰囲気放つ女が立っている。

彼女は息も絶え絶えの和樹と視線を合わせるようにしゃがむ。

「私は剣道部主将、毒島冴子だ。二年生、君の名前は？」

「ゴホッ……石井……かず……」

「石井君、良く鞠川先生を守った。君の勇気は私が認めてやる……
噛まれた者がどうなるか知っているな？親や友達にそんな姿を見せ
たいか？いやならば、これまで人を殺めたことはないが……私が手
伝ってやる」

「お………お願いします」

彼は痛みに顔を歪めながらそれでも笑った。

嬉しかった、平凡な自分でも救えた事が。そして彼女の優しさが。
だから笑えたのだ。

「え、ちよつ、ちよつと何を……」

「校医といえど邪魔しなくてもいい。男の誇りを守ってやる事
こそが」

静香の制止を振りきり木刀を構える冴子。

「女たるの矜持なのだ」

木刀を振り下ろす冴子。先程と同じようにドコか違う一撃。

安堵した様に安らかな表情のまま石井和樹はこの世を去った。

先刻、和樹に引導を渡した彼女達は廊下を進んでいた。

「職員室とは……まったく。面倒な事を言ってくれる」

「だって車なら逃げられるでしょ。キイはみんなあそこなんだもん」

歩きながらの会話。当然そこらじゅうにいる 奴ら が襲いかかる。だが冴子は木刀で上手く相手の体勢を崩す。

「どうしてやつつけないの？毒島さんなら簡単なのに」

「出くわすたびに頭を潰すのは足止めされているのと同じだ。取り囲まれてしまう。それに腕力は信じられない程強い！掴まれたら逃げるのは難しい」

「はーすごいよね……ひゃんっ」

ドタアツと転ぶ静香。それもそうだろう。彼女は運動神経が良いわけでもなく、更に走りにくい格好をしてるのだ。今まで転ばなかったのが不思議なくらいだ。

「やーん！なんなのよ、もー！」

「走るには向かないファッションだからだ」
そう言い静香のスカートにスリットを入れる。つまり破いたのだ。

「あーこれプラダなのにー!!」

「ブランドと命と……どちらが大切だ？」

「……両方!!」

「まったく……職員室か？」

冴子の耳が捉えた空気の抜ける様な音。それは確かに職員室の方から聞こえてきた。

「きゃあああああ!!」

今度は女の悲鳴が聞こえてくる。冴子と静香が駆けつけた時、見たもの。それは電動ドリルを 奴ら に突きたてる沙耶の姿だった。

だがまだ 奴ら は三体残ってる。

「そこの君！左は頼めるか？」

「えっ？あつは、はい!!」

冴子がリロード中のコータに聞く。返事を聞いた冴子は右の二体を手早く始末する。リロードを終わらせたコータも左の一体にネイルガンの一発を撃ちこむ。

「……これで終わりのようだな。鞠川校医は知っているな？私は毒島冴子3年A組だ」

「び、B組の平野こ、コータです」

「よろしく」

ガシャン

冴子とコータが自己紹介をしている時妙な音が響く。

硝子を割ったにしては鈍く小さい音。それは職員室の中から聞こえた。

落ち着きを取り戻した沙耶と静香を後衛におき冴子とコータがドアを開けて職員室の中へ入っていった。

30分前

俺達は天文台にまだいた。というより俺が動けなかった。原因は久しぶりのP i p B o y 3000の装着だ。神経を繋げるとかヤバいくらい痛い。宮本から見たらさぞかしおかしい光景だったろう。

「ねえ…もう大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ。問題ない。」

「それ、なんなの？」

宮本が俺の左手、もといP i p B o y 3 0 0 0を指差す。

「形見で御守りだ。兎の足や御札なんかより役に立つ」

「なにそれ……それより、これからどうするの？」

「籠城は駄目だな。助けが来る可能性すら分らん。干からびたくなきゃ脱出だな。」

「そう……でもここからどうやって出るのよ？」

「うーむ……何か案はないか？宮本」「麗で良いわよ。そうね……消火栓を使うのはどう？」

「なら俺も孝でいい。しかし消火栓、ね。良い案だ。向かうべきは職員室だな」

「なんで職員室なのよ？」

「あそこにはテレビもあるし車の鍵もあるだろ。それにここの丁度四階下だ」

「どういう事？」

「何、簡単だ。ダイハードって映画観た事あるか？」

ちなみに俺は藤見のジョン・マクレーンと呼ばれている程のタフガイだ。……自称だが。

「あるけど……まさか」

「そう、跳ぶのさ。」

屋上からホース巻いてダイブなんてイカれている。だが今や周りがイカれているのだ。郷に入っては郷に従えってやつだ。

「な、何でそんな危ない事するのよ!!」

「危ない？バカ言えよ。校舎の中は今やソニー・ビーン一族の巣窟だぜ。その中を通る方が危ないだろ」

「で、でも……」

不安そうに言う麗。確かにこの策は危険だ。しかし校内で二人で歩くよりはスマートで安全だ。

「それとも校内のサバトに参加したいのか」

「わ、分かったわよ。跳ぶわ。跳べばいいんでしょう!」

「オーライ、いい子だ」

なんだかヤケクソな麗を置いて準備する。まずは消火栓からホースを外し長さを調節して柵と自分に結ぶ。

そしてP i p B o y 3 0 0 0の唯一取り出せるM I S Cからレザーベルトを取り出し背中に麗をくくりつける。そして背中の麗にバットとモップの柄を持って貰い準備は万端だ。

「よし、行こうか」

「ねえ……本当に大丈夫なの？」

「大丈夫さ。成るように成る。だが声は出すな。舌嚙むぞ」

そう言つて天文台の手摺の上に立つ。

後ろからは恐怖からなのだろうか麗の震えが伝わってくる。分からなくてもない。

俺は今窓に取り付く時の為に後ろ向きで手摺に立っている。当然手摺はそんなに広くないから麗の足元にはなにもない。彼女の命を支えてるのは二本のレザーベルトのみなのだ。

「さあ、カウントダウンだ。 R E A D Y 3・2・1・G O !」

天文台の手摺から後ろ向きに跳び屋上の柵を越えて落ちていく。

一歩間違えば死に直結する。だが俺は脳内麻薬が大量分泌されてかなりご機嫌だ。今ならラッドローチも笑って踏み潰せる。

落ちてスグに振り子の様な動作になり職員室の窓の少し下に叩きつけられる。正直、足が痺れた。

「ハハッどうだ？ 案外上手くいくだろ？」

「いいから……早く窓開けて中に入ろうよ」

「了解」

当然窓は鍵まで閉まっている。

ならば無理矢理開けるしかあるまい。バリケードを張るときに使ったセロテープ。それを窓の鍵の周りに何重にも貼り付ける。

そして後はバットで叩くだけだ。

そうすりや最小限の音で硝子を割れる。

斯くして俺達は一体の 奴ら にも遭う事なく職員室に着けた。

「お、屋上から降りてきたあ!？」

職員室に入り一息つこうとした時に入ってきた一団。

同じクラスの平野に高城、それに校医の鞠川先生と毒島という三年の先輩だ。

自己紹介しバリエードを張り終わった小休止中に高城にどうやって職員室に入って来たのか訊かれ素直に喋ったら呆れられた。

というよりは平野は何故か尊敬の眼差しで見てくるし鞠川先生はマイペース過ぎてよく分かん。毒島先輩は興味深そうに俺と麗を見ている。

「さて、君達。これからの事だが……」

「足が必要だな。校門には蟻の様にうじゃうじゃいる」

「あつ!それなら私の車でっ」

「全員を乗せられる車なのか？」

「うつつコペンです……」

「部活遠征用のマイクロバスはどうだ？壁の鍵掛けにキイがあるが」それを聞いた平野が外を確かめる。そこには朝見たまま車が残っていた。残念な事に車で逃げれた者は居ないらしい。

「バスは……まだあります」

「バスはいいけど、どこへ？」

「とりあえず家族の無事の確認と安全な場所を探す」

「見つかるはずよ。警察や自衛隊だって動いてるはずだから地震のときみたいには、避難所とかが　どうしたの？」

鞠川先生の問いに大まかな目的を答え、高城が補足する。
だがテレビを見ていた麗の様子がおかしい。

「なんなのよ、これ……」

「宮本、どうしたのよ？」

テレビの近くに全員集まり毒島先輩がリモコンでチャンネルを変えた。

『……です。各地で頻発するこの暴動に対し政府は緊急対策の検討に入りました。しかし自衛隊の治安出動については与野党を問わず慎重論が強く……』

「暴動……暴動ねえ」

毒島先輩が更にチャンネルを変える。

「……ません。すでに地域住民の被害は1000名を超えたとの見方もあります。知事により非常事態宣言と災害出動要請は……『パッ！』発砲です！遂に警察が発砲しました！！状況はわかりませんが……きゃあああ！！いやっなにっうそった、助けっ！うあっあああっ！！！」

「現状が分かる最高のレポートだぜっクソったれめ。毒島先輩、次のチャンネルを」

俺の言葉に合わせて次の番組に変わる。

「全米に拡がったこの異常事態を收拾する見込みは立っておらず、合衆国政府首脳部はホワイトハウスを放棄。洋上の空母へ政府機能を移転させるとの発表がありました。なお、これは戦術核兵器使用に備えた措置であるとの観測も流れております。なお、現在の時点でモスクワとは通信途絶。北京は全市が炎上。ロンドンは比較的政治安が保たれています。パリ、ローマは略奪が横行……」

世界情勢ですら救いは無かった。全員がその事に多かれ少なかれ絶望する。

「朝にネットをのぞいた時はいつでもどうりだったのに……」

「信じてない、信じられない……たった数時間で世界中がこんなになるなんて……ね？そうでしょ？絶対に大丈夫な場所、有るわよね？きつとすぐいつもどうりに……」

俺にすがりつく麗。しかし先程の映像は俺たちに示したモノ

即ち世界のルールが変わったという事だ。もう俺たちは絶対に安全な場所など見つける事は不可能になったのだ。

「なるわけないしーなんていったってパンデミックなのよ？」

「パンデミック……」

「そんな事はどうでもいい」

「な！なによ、 奴ら の事よ！」

パンデミックだろうがエンデミックだろうがアウトブレイクだろうが知ったこっちゃない。

そう、本当に大事なのはそんな事じゃあない。

どいつもこいつも 奴ら にしか目がいかない。先程のニュースでは 奴ら なんかより恐ろしい光景が映っていたというのに……

「高城お前、 ニュースを観たる。どう思った？」

「どうって、世界中 奴ら だらけじゃない！」

「そうさ。ポトマック湖畔のオーバル・オフィスまで放棄した。国家非常事態ってやつだ。そこでみんなの友だちアングルサムはナニをと思う？」

「ナニって……まさか……」

「そうさ！アングルサムは大嫌いな中共に特上のプレゼントをするだろうよ。上手く敵さんのICBMを破壊できなきゃ晴れて核戦争だ！そしたら世界中がチェルノブイリの二の舞だろうな」

「そ……そんな、そんなの」

皆の顔色が変わる。当たり前か核戦争なんて聞いて良いイメージがあるわけもなし。

「で、でもそれは推測だよな？なら」

「そうだ。所詮、推測だ。だがな平野、可能性はゼロじゃない……ゼロじゃあないんだ。ただ憶えておけばいい。審判の日は近いって事……そして一番恐ろしいのは 奴ら なんかじゃない。人間だという事を……だ」

悪夢だ。ゾンビが闊歩しようと人が銃を持って暴れまわろうとも怖くはない。なんせ見慣れている。

だが核戦争……これだけはキャピタル・ウェイストランドに住む殆どの生き物が恐怖を覚える。

Great Warの恐怖はもはや遺伝子に刻みこまれていると言っても過言ではない。

「……すまない、少し興奮した。大丈夫、まだ平気さ。ジョン・ブルはまだ治安が保たれているしグリーンゴだって精強だ。今すぐぶちかます事はない筈だ……とりあえず学校から出よう」

「そう……だね。そうしよう。家族の無事を確認した後、どこに逃げ込むかが重要だな。ともかく好き勝手に動いては生き残れない。チームだ、チームを組むのだ。生き残っても拾っていこう」

俺の提案に賛同してくれた毒島先輩。他の皆も気を落ち着いたようだ。

「どこから外へ？」

「駐車場に近いのは正面玄関だ。先輩、俺が前に出るよ」

「そうか。なら背中任せしてくれ」

「ああ、頼りにしてるよ先輩。それじゃ、行こうか」

そうして俺達は再び地獄を突き進む事になった。

世界はゆっくりとだが確実に終わりに近づいてる。

俺には分かる。

終わりの世界の住人だった俺には

その集団は異常だった。叩く、薙ぐ、突く、撃つ　奴らと
呼ばれるモノをものともせず悲鳴と怒号、生と死が入り混じる廊下
を駆け抜けていく。

「小室君、君はやけに手慣れているね？」

「…素振りが趣味だね。西瓜割りも上手いのさ」

「ふふ…そういう事におこつ。あれは　生存者だ！」

階段の踊り場にいる五人の生徒。女子二人に男子三人で武器を持つ

ているのは男子二人だけのようだ。
だが 奴ら は四体も迫ってくる。

パスッ

ネイルガンの一発で 奴ら の一体が倒れる。
冴子の、麗の、孝の一撃がそれぞれ 奴ら の頭を叩き割る。

「あ、ありが……」

「大きな声はだすな。噛まれた者はいるか？」

「え…… いません、いません！」

「大丈夫みたい、本当に」

女生徒が必死に否定し麗が確認する。

「私達は学校から逃げ出す。一緒に来るか？」

「え…… ええ！」

女生徒は冴子の問いに周りの生徒を一度見てからハッキリと答えた。
こうして一団に五人の生徒を加え更に廊下を進む。

行き着いた場所は下駄箱が大量にある正面玄関。
下駄箱の隅から覗いたさきは

「はっやたらといやがる」

「見えてないから隠れる事なんてないのに」

「……マジか高城？」

「ええ、痛覚も視覚も無いと思うわ」

「たとえ高城君の説が正しいとしても、この人数では静かに進む事などできん。校舎の中を進み続けても……襲われた時、身動きがとれない」

「玄関を突き抜けるしかないのね」

「誰かが……確かめるしかあるまい」

誰もがやりたくない役割。皆不安と恐怖の感情を多少表情に出している。

唯一人の例外を除いて。

「じゃあ、俺行ってくる」

「孝が行くより私が……」

「私が先に出た方がいいな」

「イヤ、先輩は控えていてくれ。それに、鬼ごっこや隠れんぼは慣れてるんだ」

麗と冴子を止め腰を落とししゃがむ様にして玄関へ向かう。
歩いている彼を見て冴子のみが気付いた。
まったく足音がしない？

靴を履いているのに？

彼は一体……

そんな事を考えていたせいだろうか彼女はすぐに反応できなかった。

ガシャン！

孝は完璧な迄に音を殺していた。音の出所は一団の最後尾の男子だった。

彼はプレッシャーと体力の低下から立ちくらみを起こし持っていた刺又を落としてしまった。

「K a r m a」俺が囷になろう。

このアホどもが！勝手にくたばりやがれ！

全員走れ！一気に突破する。

「はし「先輩！！聞け！！俺が！！囷を！！する！！」

孝の大声に群がり始める 奴ら。バットで撃退しながら彼は叫ぶ。

「俺が 奴ら を引き付けたら走れ！！合流地点は御別橋で18時、もしいかなかったら諦めてくれ！！」

駐車場とは逆の方へ走り去る孝に 奴ら は殆ど引き付けられる。

冴子は、否、冴子達は何も言えなかった。

何故ならそれが一番安全策だからだ。勿論、感情的には助けに行きたい。しかし動けば乱戦だ。必ず誰か死ぬ。彼の行動を裏切る。だ

から動けない。

「今だ……出るぞ」

動き出す冴子達。冴子と麗以外、皆顔色が悪かった。当たり前だろう。

彼女達は大の為に小を切り捨てたのだ。

困役が志願したとはいえ学生が習う青臭い正義や道德とは真逆の行い。

最後尾の男子など顔色が蒼白だった。

冴子は彼は絶対に生きて御別橋に来ると信じたし麗は今までの無茶苦茶ぶりからきつと大丈夫と判断しての事だった。

だが結局バスに乗り込むまで一団は無言だった。

＼VAULT DWELLER'S SURVIVAL GUID
E a p e r s o n v e r s i o n ｝

毒島冴子AGE18

STRENGTH〔7〕
PERCEPTION〔6〕
ENDURANCE〔6〕
CHARISMA〔7〕
INTELLIGENCE〔7〕

AGILITY「7」
LUCK「6」

Barter	「15」
Big Guns	「0」
Energy Weapons	「0」
Explosives	「0」
Lockpick	「0」
Medicine	「50」
Melee Weapons	「98」
Repair	「20」
Science	「15」
Small Guns	「0」
Sneaking	「64」
Speech	「79」
Unarmed	「78」

ヒロインその式。人気、能力とどちらも高い。正直この人の方が主人公に向いていると思う。公式チート。

平野コータAGE17

STRENGTH「4」
PERCEPTION「5」
ENDURANCE「4」
CHARISMA「4」
INTELLIGENCE「6」

AGILITY [6]
LUCK [6]

Barter	[5]
Big Guns	[93]
Energy Weapons	[20]
Explosives	[82]
Lockpick	[72]
Medicine	[42]
Melee Weapons	[20]
Repair	[78]
Science	[31]
Small Guns	[99]
Stealth	[54]
Speech	[29]
Unarmed	[14]

第一印象はオタク。実際その通りだった。ミリタリーオタクにふさわしい能力値。だが少し鍛えた方がいい。彼には某吸血鬼漫画の少佐の如く、諸君 私は戦争が好きだと言わせたい。名前的にも外見的にも。

4（前書き）

時間を掛けてもクオリティが上がらないorz

こんな妄想駄文ですが読んで頂けたらと思います投稿しました。感想やダメ出し、妄想乙、又はアドバイス等がありましたら遠慮なく言ってください。

裏庭を駆け抜ける孝。

端から見たら他人の為に身を挺する彼は聖人君子に見えるだろう。

確かに彼はそれなりにお人好しだがそれ以上に現実主義者だ。

キャピタル・ウェイストランドで生きるのに必要なモノはなにか？

能力……確かに能力も必要だ。だが違う。

金……金が有れば安全も買えるかもしれない。だが違う。

彼が生きてきた中で見つけたモノ、命と同じ位……いや、それ以上に大切なモノ。

それはルールだ。

あらゆる汚物を詰め込んだ様な掃き溜めの世界。勿論ルールなんてない。しかし無法の中でこそ己にルールを課さねばならない。

さもなければ、とつくの昔に彼はレイダーか奴隷商人になっていただろう。

それはつまり死んだのと変わらない。

彼のルールはシンプルだ。死人との約束は絶対に守る事と己を裏切らない事。

これがシンプルだが奥が深い。

つまり孝はこのルールに従ったに過ぎない。井豪永との約束……宮本麗を無事に安全な所まで送る。

この約束を果たすために 奴ら との乱戦を避け己が囷になり麗の生存率を上げたに過ぎないのだ。

「ここまで引き付ければ十分か」

孝はばやきながら裏門の柵によじ登る。相棒のバットは思いきり振り回し過ぎて半ばからぱっくり折れており手持ちの武器は無い。

「さて どうしようかな」

柵の上で安全とはいえ状況はかなりマズイ。周りは 奴ら だらけで動けない。更に武器すらない。だが孝は慌てない。慌てても死ぬだけと知っている。かつて地獄で鍛え上げたダイヤの魂はなおも健在だ。

孝は決断した。

バットの残骸を投げ 奴ら の気を逸らし、その隙に音もなく柵から学校の外へ降り 奴ら の間に潜りこんだ。

噛まれない理由、それは彼が全く音をたててないからだ。

Sneakと呼ばれるスキルを最大限に発揮しているから彼はまだ

奴ら にならずに済んでいる。

だがこのスキルを使用するのには莫大な体力と気力がいる。

このまま 奴ら の群れの中を進んでも体力が気力どちらかが切れて 奴ら に喰い殺されるだろう。

なのに何故、彼は進んだのか 賭けに出たのだ。

柵の上に居ても希望は無いが外の道路には希望がある。孝はそう判断して己が命を賭け金としレイズしたのだ。

奴ら の間をすり抜ける様に忍び歩く。孝の顔には汗が浮かび呼吸も辛そうだ。

一挙手一投足に気をつけなければならぬ為にじわじわと体力と気力が削られていく。

それでも彼は前に進む。

希望を捨てずに懸命に

宮本麗は憤慨していた。孝のおかげでバスに乗れたというのに害虫までついてきたのだ。

紫藤という名の害虫が。

追い払いたかったが卓造と呼ばれてた男子が迎え入れた。
更にガタガタと喚く不良までいて不快指数は上がるばかりだ。

「もう、いい加減にしてよ！　こんなんじゃ運転なんか出来ない！」

静香の言う通りだった。しかし、なおも喚き続ける不良。

遂にコータがネイルガンを構えようとしたが沙耶が止める。

その沙耶も気付かない。

既に麗が動いていた事に。

「がっ！　あゝっ！　うあゝ、ゲホゲホッ」

麗が不良の水月を薙いだ。勿論人体の急所を打たれた不良は胃液を吐き出しながら悶える。

「実にお見事！　素晴らしい腕前ですね、宮本さん！」

拍手をしながら視線を集める様に前へ出てくる紫藤。

「しかし……こうして争いが起こるのは私の意見の証明にもなっています。だから、リーダーが必要です。我々には！！」

「で、候補者は一人きりってワケ？」

「私は教師ですよ、高城さん。そして皆さんは学生です。それだけでも資格の有無はハッキリしています」

この紫藤という男。間の取り方や視線の集め方が上手かった。きつと授業なども巧く行うのだろう。だが周りを見渡す眼には教え導く者として大事な慈愛の色などなく将棋やチェスの駒を見るかの如く冷たい眼をしていた。

「どうですか、皆さん？ 私なら……問題が起きないように手を打てますよ？」

沙耶、麗、コータ、冴子、静香、以外の生徒が賛成の意を表して拍手する。具体的な案を挙げてないにも関わらず、だ

「……と、いう訳で、多数決で私がリーダーという事になりました」拍手が沸くなか嫌悪を露に麗が動き始める。

「先生、開けて……開けてください！ 私、降りる！ 降ります！」

「え？ でもあの」

「~~~~~ッッ！！」

「宮本!？」

バスのドアを開け飛び出す麗を呼び止める冴子。しかし麗は止まらない。

「イヤよ! そんな奴と絶対一緒にいたくなんかない!!」

「行動を共に出来ないというのであれば、仕方ありませんね……」

紫藤の発言を無視し冴子もバスの外に飛び出し麗を止めようと腕を掴む。

「歩きじゃ危険過ぎる。せめて街まで……」

冴子と麗の言い争いを止めたのは喧しくなるクラクションの音だった。

その音の発生源が物凄い勢いで突っ込んでくる。

大型バスだ。

十字路のトンネル前 冴子と麗がいる所の前で車にぶつかり横滑りしてくる。

「走れ!!」

間一髪トンネルに入り難を逃れた冴子と麗だがトンネルの入り口がバスで封されてしまった。

それに気づき沙耶とコータがバスから出てくる。

「これでは……」

「先輩！ 宮本！ 大丈夫！？」

「ああ、大丈夫だが……ここはもう通れまい。御別橋だ、御別橋で19時に落ち合おう」

冴子が言った瞬間バスが崩れ中から 奴ら が燃えたまま出てくる。

「分かったわ！御別橋でまた」

沙耶とコータは急いでバスに戻り静香に告げる。

「ここはもうダメだわ静香先生。引き返して別の道を」

「わ、分かったわ」

そうしてバスは別の道を行く為に道を引き返していった。麗と冴子を残して。

バスの爆発を逃れトンネルを脱け出した冴子達。しかし待ち構えていたのは無数の 奴ら だった。車かバイクがなければあつという

間に挟まってしまいう程の数だ。

「これは……マズイね。逃げ場も無い」

「こんな……こんな事って！」

左右と前から 奴ら が迫る。

どんなに冴子と麗が強いと言っても大量の 奴ら に三方から襲われたら為す術もない。

二人ともトンネルの方へ後退る。しかしそこにも逃げ場はない。あ
るのは入り口が塞がれたトンネルがあるだけだ。

「これよりは戦の一字在るのみか……」

「こんなに居たんじゃスグに噛まれちゃうわよ！」

「だが……なんの音だ？」

あり得ない筈 だった。

トンネルから響くエキゾースト音。水冷4ストロークDOHC4バルブ並列2気筒のバイクが奏でる爆音がトンネルから出てきて二人の前に止まる。

「なにやってんだ？ こんな所で」

「た、孝……！」

バイクに乗っていたのは孝だった。孝はあの地獄の状況を潜り抜け転倒していたバイクを拝借し橋を目指した。

初めてバイクに乗った筈なのにアクセルを思いっきり開けてフルバ

ンクをかましてあつという間にトンネルに到着してしまった。

孝の目の前には炎上したバスに封鎖されたトンネル。普通は諦めて別の道を探すだろう。だが、彼は違う。

ウェイストランドの鉄則その一『VERY HARDの道こそ近道』を遵守した。

車の残骸をジャンプ台代わりにし横倒しになったバスの上を飛び越えたのだ。

「話しは後だ。小室君、二人乗れるか？」

「どうにかつてとこだ。後ろに一人、前に一人だ」

後ろに麗を、前に冴子を乗せて走り出した。しかし唯一つ誤算があった。

「柔らかく……されど張りのある……いい御手前でした」

ボソボソと呟く孝。バイクに無理矢理三人乗り……それは密着するという事だ。美人が二人前後に密着している状態。

つまり彼が何を言いたいかというと『性欲を持って余す』の一言に尽きる。

そんな孝の気持ちを知らずに襲いかかる 奴ら を避けながら走行していく。

天国を味わいつつも地獄の様な道を駆け抜ける。

どれだけ走っただろうか。今や周りに 奴ら の姿すらない。普段は賑わう商店街も誰も居らず辺りはバイクの音以外は何も聴こえない。

「誰も……いない」

「逃げたか、死んだか……」

「死んだら 奴ら になるじゃない!」

「生者を追いかけていったのだろう」

周りを見渡す彼等の目には平穩の名残と誰かの終わりを告げる紅で彩られた街が映る。
一行はさらに進む。

「孝、右! 交差点の右側!」

麗の指差す方、そこにはパトカーがあった。トラックに真横から当てられたのだろう。中に居た警官も即死したようだ。

「こりゃひでえ……がミンチになってないだけマシか」

「……君は本当に手慣れてるね。まるで追い剥ぎか野盗のようだ」

「孝もイヤな事言わないでよ。想像しちゃったじゃない」

バイクから降りパトカーを物色する三人。死人から物を取るという行為に罪悪感を感じる人もいるだろう。

だが幸か不幸か麗も冴子も吹っ切れている。例え吹っ切れてなくても彼は嘲笑いながら言うだろう「死人は道具を使わない。奴らもまた然りさ」と

「豆鉄砲に警棒、手錠か」

「それともう一人の巡査の弾だ。銃はグリップが折れててつかえな
いが弾は平気だろう」

S & W M 3 7 エアウエイト 日本の警官が持つ制式拳銃。総弾数5発、弾は38口径を使用している。

「銃は孝が使って、警棒は」

「麗が使えばいい。モップの柄よりは丈夫だ……」
「つとこの辺にガソリンスタンドってあったか？」

「信号を二つ行った所にあつたと思うが」

再びバイクに乗り込む三人。ガソリンはEMPTYに近い。だが幸いにもガソリンスタンドが近くにあるのだ。ほんの数分で着く。

「まだ、ガソリン残ってるかしら」

「大丈夫だろ……ここセルフ式かマズイな。この前、パチンコで負けたから無一文だ。麗、先輩、金持っていないか？」

「財布鞆の中に入れたままよ」

「私も同じだ、どうする？小室君」

「昔、ある偉い人は言った。お金が無いなら有るところから持ってくればいいじゃない」と、いう訳で取ってくる」

そう言つてガソリンスタンドのオフィスに向かう孝。オフィスの中には 奴ら が居るように見えないが警戒しつつ、レジをいじる。ウェイストランドの数多くのレジを征してきた彼にはこの程度のレジに苦勞する訳もなくあつさりお金を抜き取り外へ戻る。

「やりたい放題ね」

「君は普段、強盜でもしてるのか？」

「酷い言い草だな。善良な学生にむかつて」

その金を使いバイクに給油していく。その時、麗が冴子に囁きオフイスの方へ歩いて行つた。

「宮本君だが御手洗いのようだ。一人は危ない、私もついていくよ」

「あゝ了解」

そうして一人で給油を続ける。周りには 奴ら も居らず安全だ。今のところは

「おい、兄ちゃんよお！良い女連れてんなあ」

ダボダボの服にバンダナを着けた所謂B系の男が寄ってくる。手に

はナイフを持ち瞳孔は開いている。一目で分かる。
コイツは壊れてる。

「おら！ 消えろよ！ あの女共は俺が貰ってやつからよ！」

「Strength」額でタバコを吸わせてやろうか！クソゴリラ！

「Speech 7%」おい、おい、落ち着けよ。何があつたか
知らんが馬鹿な真似はするな。

面白い冗談だ。あいつらは俺のモンだ。テメーになんぞやらねえ。

失敗

「うるせえ！！いいからさっさと消えろよ！」

「そうかい、じゃ、サヨナラだ」

左腕のPip Boy 3000を稼働させV・A・T・S・システムを起動する。

V・A・T・S・ 正式名称The Vault Tec Assisted Targeting System、読んで字のごとく狙いを定めるのを補助するシステムだ。
限られた間、時間を緩和し、戦闘状況を戦略的に判断できる。

これを何故今まで使わなかったのか。理由は簡単、 $V \cdot A \cdot T \cdot S$ は肉弾戦には向かないのだ。身体に多大な負担を強いる $V \cdot A \cdot T \cdot S$ を使って格闘など常軌を逸している。だから、今まで使わずに来た。

ゆっくりと動く時の中、エアウェイトを暴漢の頭に向ける。撃鉄を下げる。

そして トリガーを引く。

パンツという炸薬が炸裂する音が響く。

暴漢にむかって、ゆっくり、ゆっくりと銃弾が進む。

狂気の形相のど真ん中に銃弾がめり込み後ろに倒れる。

ここまで一秒も掛かってない。しかし孝は全て見届けた。死に顔も死に方も……だ。

幾千幾万と繰り返してきた作業。あんなに軽いと思った銃が少し重く感じる。

「小室君！ なにがっ ！」

「た、孝……殺した……の？」

鼻の穴が一つになった死体と銃を持っている孝。

それから導き出される解は一つ。冴子も麗も理解した。したが故に分からなかった。何故、殺したのか。

「小室君、何も殺す事は ！」

「ガキの喧嘩じゃないんだ。やるなら徹底的にやらなきゃダメだ。」

それにサイコ野郎は、壊れてた。 奴ら に喰われるよりはここで腐った方がマシだろう？」

この理屈が理解できる日本人は殆どいない。何故ならコレは最下層の人々の理屈だからだ。スラムやバリオの無頼の理屈を裕福な日本人に理解できようはずがない。

「でも……命を奪ったのよ……」

「おい、麗。いいか、よく聞けよ。今の世界は命が安いんだ。ケツを拭く紙、程度の価値しかない」

「そんなの！……そんな……」

「ヒデエ世界だ。まるで、ヨハネスブルグとソドムの街を足して圧縮した様なモンだ。……行こう、 奴ら が湧いてきた」

バイクに乗り移動を始める。麗はなおも難しい顔をしている。

「麗、今のは俺の考えだ。押しつける気は無いよ」

「うっん……分かってるよ。孝が言ってる事は正しいって。でも……でも」

「あゝ、今はいいよ。とりあえず生き残ろう。何事もそれからだ」

「うん……」

孝の背中に顔を押し当てる麗。

永とは違う香り。でも心落ち着く匂い。

「良い雰囲気の中、すまないが、何故私達があそこにいたのか気になるのか？」

「そっぴゃ、そっぴゃ。バスはどうした？」

「うむ。実は」

冴子話を聞き、孝は晒した。

「紫藤か。口先だけじゃないなら大したもんだが……あれは腑抜けだからな。」

「知っているのか？」

「前に奴の授業を受けたよ。あいつの授業は教えてるんじゃない。できる奴とできない奴を区別するための授業さ。くだらない」

吐き捨てるように言う孝。彼が尊敬する教師は母とMrブロッチ、後は孤児院の姉さん先生しかない。三人とも生徒に優劣をつける事なく平等に優しく、されど厳しく教育してくれた。

「私とて紫藤教諭は好きじゃないよ。理由は小室君と同じだ」

思わぬ意見の一致に二人は笑いながら見つめ合う。

そんな良い雰囲気の中、バイクは御別橋にむかつて駆ける。

彼等が愉しそくに話しをしている時、後ろにいる麗の孝に掴まる力が増しているのに気付かぬまま

もちろん、終わりは孝達の周囲だけで起こっていた訳じゃなかった。

『Tokonosu Tower? JX089? Ready
or TAKE OFF』

『? JX089・Tokonosu Tower Hold of
RUNWAY34・we have a……problem』

多くの人が逃げ込もうとした床主洋上空港もまた 奴らが溢れている。

特殊急襲部隊、通称SATに特殊警備部隊、通称SSTに麻薬GM
ン、機動隊の特殊銃器隊が駐在していたがほぼ壊滅してしまい 奴
らを殲滅する事は不可能になった。
しかし、生き残った者はまだ戦っていた。

「あらゝいい男。見覚えがあるわ」

「床主へ公演に来てた俳優だよ」

葡萄の状態で狙撃銃のスコープを覗き軽口を叩く女。 県警特殊急襲部隊、第一小隊狙撃手の南リカそれに答えるのは同部隊の観測手の田島亮だ。

「……左右の風はほぼ無風。修正の要なし！ 射撃許可確認した！
」

刹那、銃声が轟く。
リカのPSG 1の銃口から吐き出される7・62ミリ弾が 奴らの頭を撃ち抜く。

彼女は続けざまに発砲するが一発も外す事なく 奴ら を貫く。

「お見事！化け物どもは全滅だ！」

滑走路にいた 奴らは全て倒したが空港にはまだ大量の 奴らがいる。だが本土よりは幾分かマシだろう。

「にしても……船でしか来られない洋上空港にまで出るとはな。立ち入り規制はしてるんだろ？」

「ええ。要人とか空港の維持に不可欠な技術者、そうした連中の家族……その中の誰かが？なつた？のよ。今はまだいいけどいつまで持つか。」

「化け物による被害の少ない北海道や九州の空港は受け入れ拒否を始めている。俺たちが空港警備の為に派遣されてなければどうなつてたことか」

奴らが排除された滑走路から飛行機が飛び立つ。先行きの不透明さからくるイヤな沈黙。それを断ち切るように軽口を叩く。

「これはいざというときは都市伝説に頼るしかないかもな」

「何よ？都市伝説って？」

「この空港の地下には誰も入れないシエルターがあるってウワサだ。そこに逃げ込めば多少は持つ」

「誰も入れないんじゃ逃げ込み様がないじゃない。それに、私は街に行くわ」

田島の冗談で軽くなった空気の中リカは自分の方針を告げる。まるで買い物に行く様な口調だ。

「男でもいるのか？」

「……親友がいるのよ」

その親友の鞠川静香はマイクロバスの運転をしていた。車内は相変わらず紫藤が演説してコータや沙耶、静香以外の者は皆、心酔してしまった様だ。もう既に沙耶の頭の中ではこのバスは放棄すべきと結論が出ていた。

「……………平野っ」

「んあ……………あ、高城さんおあようございま」

「よく寝られるわね」

「だって……………これじゃあ……………」

窓の外から見える景色は大渋滞を起こしている車の河と逃げ惑う人々の河ばかりだ。おかげでバスはまったく動かない。

「街の外に逃げた方がいいのに」

「車だけが脱出の手段じゃないわ」

「あ、洋上空港か」

「港もあるし都市部が危険なのは目に見えてるからどこかの島へ逃げようとしてるのがたくさんいるはず。武器の人工比が高い孤立した地域とかも」

「……………沖縄とか？」

「適切な対処が行われていたら北海道や九州でも……飛行機が向かっているのはたいていそのあたりよ」

「僕らもそういうところいきますか」

「遅すぎるわ。自衛隊とかアメリカ軍が多い地域はたとえ 奴らを抑制できても受け入れに厳しい方針をとり始めているはずよ。いえ、いずれ世界のあらゆる場所がそうなる……他者との接触は 奴らの侵入を意味しかねないとしたらアンタどうする？」

「引きこもります」

コータは想像し言った。そして気付いた。
もし皆そう思ったら？

「世界中の人間がそう考えたらどうなるかしら？生き延びるのに必要な最小限のコミュニティを維持することだけを考えるようになったら……」

「高城さんは本当に頭がいいんですね」

しかしコータはそれを羨ましいとは思わない。聡明な彼女の世界はどんな地獄なのだろうか。勇者は一度しか死なないが賢しい人は何度も死ぬ。現実の重さに世界の非常さに心を八つ裂きにされて彼女は何度死んだのか。

「なに言ってるのよ」

演説をしている紫藤を指差し先程までの演説の概要から推測し話す。

「あいつ、もうそういうノリになってる。自分で気づいてるかどうかはわからないけど……いい？ たった半日でそうなのよ？」

「友愛しましょうか？」

「それより、あたしたちがどう生き残るか考えた方がいいわ。信用できる相手と……もうっ先輩か小室がいたら相談できるのに」

「皆、無事……ですかね？」

コータの脳裏に浮かぶのは美女と呼ぶにふさわしい二人と捉え所のない男。全員が自分達より格段に強い事を知りつつも心配せずにはられない。

「大丈夫よ……きっと……それよりも」

沙耶は未だに演説を続ける紫藤に視線を向ける。

「こういう時だからこそ、我々は藤見学園の者としての誇りを忘れてはなりません。その意味でバスを飛び出していった宮本さんや毒島さんは皆さんの仲間には、ふさわしくなかったのです!!」

「マジ、ヤバイわよ」

「確かに……まるで新興宗教の勧誘みたいですね」

「まるでじゃなくて、まんまそのとおりよ。新興宗教……紫藤教の始まりを目にしているの。あたしたちは。話を聞いてる連中を見ているさ」

紫藤の演説を聞いてる連中を見て思うのは狂信だろう。耳触りの良い言葉で洗脳を施しつつ自分の都合のいい方へ上手く誘導した結果である。

「で、どうするの？私も一緒に行きたいから」

今まで話を聞いていた静香が同道の意を伝える。意外だ。てっきりバスに残ると沙耶は思っていた。

「いいの？」

「私はもう両親いないし、親戚も遠くだし。こんなこと言っちゃいけないんだけど……紫藤先生あんまり好きじゃないの」

その発言に皆笑い、善は急げとばかりにバスを降りようとする。それを見咎めた紫藤が止める。

「どうしたのですか、皆さん？ここは一致協力して……」

「ご遠慮するわ、紫藤先生。あたしたちはあたしたちの目的があるの……！ 修学旅行じゃあるまいしあんに付き合う義理なんてないわ……！」

紫藤の話を遮るように言う沙耶。車内は一触即発の雰囲気になる。

「あなたがそう決めたのならどうぞ自由に、高城さん。なにしろ日本は自由の国ですからね……！ しかし……あなたは困りますね鞠川先生！ 現状で医師を失うのはマイナスが大きすぎます。」

自分の演説に酔ったかの如く静香の元へゆっくりと歩みよる紫藤。

「どうです、残ってもらえませんか？ こちらにもあなたを頼りにする生徒たちがいるのです。さあ、鞠川先生。居場所さえはつきりさせ……」

紫藤の中では失敗する筈のない説得だった。こちらの方が人数も多く安全性も高い。いざとなれば男子生徒をけしかければいい、そう思っていた。その時は

バシユ！

紫藤の頬をかすめた一本の釘がその思惑を打ち碎いた。

「ひ 平野君……？」

「外したわけじゃない。たまたま外れたんだ」

既に車内の雰囲気は一変していた。コータの狂気が紫藤に恐怖を他生徒には畏怖を与えた。

「き 君はそんな乱暴な生徒では……」

「俺が学校で何人片付けたと思ってるんです？ だいたいおまえは前から俺のことバカにしてやがったじゃねーか……！」

学校では見た目から馬鹿にされ虐めまではいかないが絡まれていた。しかしヘラヘラ笑って誤魔化していた。異端になりたくないが為に。日常から外れない為に。

「我慢してきた！俺はずっと我慢してきた！普通に生きていたかったからずっと我慢してきたんだ！！でも、もうそんな必要はない！！普通なんてなんの意味もない！！」
自然と口が半月のような笑みを描く。
だからぼくは……

「殺せる、生きてる奴だつて殺せる」

「ひ 平野君 そんなことは……」

「高城さん、先生。先に降りてください！」

沙耶は振り返りコートを見る。

「ふーん、少し見直したわ」

賞賛の言葉に気付かずバスを降りるコート。
袂を分った者を一瞥もせず荒々しくドアを閉めた。

孝達は御別川の側道をバイクで走っていた。床主大橋を北に抜けて道沿いに走れば直ぐに御別橋に着く。

「もうすぐ御別橋ね……」

「まあ、バスだからな。生きてるだろうさ」

「だが、橋は規制されている。どうする？」

冴子の疑問はもつともだ。橋を渡れなければここまで来た意味が無い。だが有効な手段など殆どない。

「今はどうしようもないな。とりあえず生きてりゃ道は拓ける」

「！　ね、あれ、あそこ！！」

麗の示す先。そこには見覚えのある三人が歩いていた。コータ、沙耶、静香だ。

「先生！」

「あらあら、宮本さん！小室君も毒島さんも！」

バイクから降りて三人に近づく。麗は静香に抱きつき、冴子は沙耶と話しをしている。

「さあ、再会を祝すのはこれくらいにしてこれからどうする？」

冴子の問いに静香が控え目に挙手する。

「あの……今日は、もうお休みにした方がいいと思うの」

「お、お休みって」

気の抜けた発言に呆れた様な声を出すコータ。

「一時間もしないうちに暗くなるから、暗くなって……出くわしたら毒島さんでも大変でしょ？」

「それはそうだけど、どこで朝までの時間を潰すのよ？」

「籠城でもするか」

茶目っ気たっぷりに床主城の三重六階の天守閣を見上げ言う冴子。

「くっ実に心躍る提案だ。しかし残念だが人が足りない。あと千人程居たらな。俺が真田ばりの戦を見せてやれたんだがな」

そんな二人のやり取りを見て麗は自分の中の感情を自覚する。そのドロドロとした感情が麗の心をじわじわと焦がしていく。

「あ、あのね。使えるお部屋があるんだけど、歩いてすぐの所」

「彼氏の部屋？」

静香は沙耶の疑問にあたふたしながら答える。

「ち、違うわよ。お、女の子のお友達の部屋だけど、お仕事が忙し

くていつも空港とかにいるから鍵を預かって空気の入れ換えとかしてるの」

「マンションですか？周りの見晴らしはいいですか？」

「あ、うん。川沿いに立つてるメゾネットだから。すぐ傍にコンビニもあるし。あ、あとね、車も置きっぱなしなの。戦車みたいな四駆よ」

静香はコータの質問に答えると身振り手振りで車の凄さを伝えようとしたのだろうが……正直分らない。

「移動手段はどのみち必要だ」

「それじゃ、先生。後ろに乗って道案内よろしく」

バイクに跨がった孝がバイクに火を入れる。

「先生と一緒に確かめてくる。先輩、後は頼む」

「承知した」

冴子が頷いたのを見て静香が乗ったのを確認し走り出した。

「んゝ 気持ちいい」

「な、なんだ……この戦闘力は？先輩や麗以上じゃないか……先生の乳にはどれだけ夢とロマンが詰まってるんだ」

「えーなんてー？聞こえない」

静香は後ろからしつかり掴まっている。孝の背中には凶悪なまでの柔らかさの胸……いや御胸様が当たっているのだ。顔色は変えずにだが背中で感触を楽しみつつ走る。

「あ、そこ、そこよ」

「うえ、ハンヴィーか」

「ねっ戦車みたいでしょ」

そこにあつたのは高機動多用途装輪車両、通称ハンヴィーだ。名前の通り水の中や砂漠にも運用可能だ。

メゾネットも柵がしつかりしてるし門も強固だ。これなら安心だ。

「後は中の掃除か、面倒だな。おっ着いたか」

周りを見て回り静香の元に戻ると既に皆集まっていた。

「高城、なにか使えるものあるか？」

「小室！これでいい？」

工作室からくすねてきた袋からボールを取り出し孝に渡す。
そして音を聞きつけたのか 奴らがメゾネットの中から姿を現す。

「ああ、充分だ。さがってな」

「お互いにカバーしあうことを忘れるな！」

冴子の忠言と共に門を開け放つ。

「行くぞ!」

孝と冴子が前衛で打ち洩らしを麗とコータが刈り取る。この布陣で更にさして数のいない 奴ら など一網打尽という結果にしかない。

そして、終わりの中で迎える初めての夜が訪れた。

＼VAULT DWELLERS SURVIVAL GUID
E a p e r s o n v e r s i o n 〵

高城沙耶AGE16

STRENGTH[4]
PERCEPTION[5]
ENDURANCE[4]
CHARISMA[5]
INTELLIGENCE[10]

AGILITY「4」
LUCK「6」

Barter	「30」
Big Guns	「0」
Energy Weapons	「10」
Explosives	「20」
Lockpick	「10」
Medicine	「60」
Melee Weapons	「32」
Repair	「28」
Science	「80」
Small Guns	「35」
Sneaking	「17」
Speech	「60」
Unarmed	「26」

天才少女。漫画で見たときはコイツ……死ぬなと思ったが生き延びたキャラ。とりあえずパパに似ないでよかった。

鞠川静香 AGE 27

STRENGTH「3」
PERCEPTION「5」
ENDURANCE「3」
CHARISMA「4」
INTELLIGENCE「8」
AGILITY「3」

LUCK[9]

Barter [60]

Big Guns [0]

Energy Weapons [0]

Explosives [0]

Lockpick [0]

Medicine [100]

Melee Weapons [8]

Repair [11]

Science [40]

Small Guns [0]

Sneaking [15]

Speech [60]

Unarmed [6]

魔性の女。しかし精神年齢が低い。アニメではそういうキャラだからとキャラ作りを暴露。静香……恐ろしい子！

新しいPERKSを手に入れました。

INSANE RIDER (1)

最大ランク：2

条件：無し

第一ランクでは二輪のみ効果を現します。もはや貴方は公道最速の男です。さあ、世界を縮めろ！

4（後書き）

P i p B o yの中身ですがもう少し先になるかと思えます。
でも、あれです。遊戯王の遊戯君とかのデッキと同じで中身がわか
ると楽しくなくなるような気がします。

5（前書き）

随分時間がかかりました。しかし相変わらずの低クオリティ。作者の自己満足作品ですが読んで頂きありがとうございます。

誤字脱字、感想、アドバイス、妄想乙、等どしどし書いてください。作者もスペランカー並みの心で受け止める所存です。

宵闇の中、公道をバイクが駆けていく。その速さは尋常じゃない。峠を攻める走り屋の如くアクセルを全開にし孤児院を目指して急ぐ。

バイクを運転する孝の頭に浮かぶのは過去のなんて事の無い日常。しかし孝にとつての非日常の日々。孤児院で過ごした日々なんてこの七年間一度も思い出さなかった。なのに、世界が終わったら急に思い出してしまった。

赤ん坊の世話をさせられた事、孤児のガキ共と戯れていた事、姉さん先生にイタズラがばれて怒られた事、馬鹿みたいに騒がしく、けれど明るく笑顔に満ちた食卓。

分かってる、分かってるさ。孤児院にはもう誰も居ない筈だ。皆、避難してると思う……がもしかしたら姉さん先生は残ってるかもしれない。いや、残ってるだろう。孤児院にいた子供を避難させて自分は他の子供達が帰ってきた時の事を考えて残ったに決まってる。

先生は若くして孤児院を運営するような酔狂な人間だ。美人なのだから他にも生き方があっただろうに。

クソっ！誰もが自分の事しか考えてない中、彼女は自分よりも子供を優先するだろう。四年も見てきた俺には分かる。先生は孤児院にいる。

なんて馬鹿なのだろう。だが命を懸けて救う価値のある気高き馬鹿だ。助けてみせる。その為に俺はメゾネットを飛び出してきたんだから

孤児院に着いた時には辺りは真つ暗だった。微かな月明かりの中孤児院に入る。どうやら 奴ら はこの辺には居ない様だ。孤児院の中は荒らされていたが人が居る痕跡がある。

「こゝここからでていきなさい！！ここは僕たちの家です！！」

「お前は……？」

孝に叫んできた子供。年は十くらいだろうか、幼いが整った顔つきにお世辞にも高いとは言えない身長。声も高いし髪も長い。

「まさか…孝父様…？」

「父様？……まさか、お前、奈央か？」

「はい！ 父様お久しぶりです！」

「ま、まあ、細かいことは後だ。姉さん先生は？」

孝に抱きついてきた時の驚きと喜びの表情はすぐに暗い表情に変わった。か細い声で奥に居る事を伝える。

奥の部屋へ入る孝。そこには姉さん先生と思わしき影が椅子に座っていた。月の光が徐々に彼女の姿をうつしだす。

荒い呼吸、吐血の痕、衰弱していると一目でわかる。片方の手にはナイフを持って背もたれに寄り掛かるようにしてようやく座れているような状態だ。

そして孝は見た。見てしまった。ナイフを持ってない方の手を怪我している。タオルで無理矢理止血した腕は蒼白になっている。

「父様……母様、大丈夫ですよ？僕、学校脱け出して帰ってきたらもう母様噛まれてみたいで……」

「何時に……何時に帰ってきた？」

「三時位ですけど、父様、母様は大丈夫ですよ？あんなゾンビなんかにならないし大丈夫ですよ！」

「七時間以上も……無理だ。楽にしてあげよう」

発症まで早くて数分、遅くて数十分だろう。それを数時間も耐えたのだ。どれだけの苦痛、どれだけの絶望を越えたのだろう。孝には想像もつかないが、もう楽にしてあげる事こそが唯一の孝行だと理解した。

だが孝の言葉に真つ青になる奈央。そして顔を怒りに染めて叫ぶ。

「なんでですか！！ 母様はあんなゾンビになってない！！なのに……」

「お前が居たからだ！！先生が 奴ら になって誰を最初に襲うと思う？そうさ、お前だ。先生が未だに 奴ら になってないのは愛すべき子供達に牙を剥かない為なんだよ！」

手に持つナイフは自衛の為じゃない筈だ。 奴ら になる前に自殺する為に持っているのだろう。彼女はキリスト者だ。自殺は罪になる。それでも子供を救いたかったのだろう。たとえ、己が神に逆らっても。

「姉さん先生、俺だ、孝だ。助けられなかったけど救いにきたよ。借りを還しに来た」

先生は苦しそうにしながらも、それでも優しく微笑んだ。孝は神様なんぞ全く信じてはいない。それでも先生の為に唯一知ってる祈りを唱える。

「Our Father in heaven, hallowed be your Name, your kingdom come, your Will be done on earth as in heaven. Give us today our daily bread」.

奈央は横からその光景に見惚れていた。月の蒼い光と椅子に座る先生の慈愛に満ちた微笑み、そして中世の騎士のように跪き祈りを捧げる孝。その全てがまるで絵画から飛び出てきたかのようで

「Forgive us our sins as we forgive those who sin against us. Lead us not into the temptation of sin, but deliver us from evil. For the kingdom, the power, and the glory are yours now and forever」.

立ち上がり銃を構える孝。静寂が痛い。喉がヒリヒリする。出来るならば泣き叫びたい。だが、駄目だ。終わらせなければ。先生の起こした奇跡を無駄にはできない。

「Amen」

掠れた声と共に静寂を破り響きわたる一発の銃声。奈央はその音で現実に取り戻される。

「か、母様は天国に逝けたの……ねえ、父様。な、なみだがどまらないよ」

「今は泣いとけ。それで充分に泣いたら前を向け。そうすりや自然と前に進める」

泣いてる奈央に背を向け先生の遺体を抱える。予想どおり軽い。こんなに軽い身体なのにいつも苦勞を抱えている人だった。でも辛いことも苦しいことも笑って乗り越える強さを持った人だった。そんな人がこんな最後を迎えなければいけない事が悔しかった。せめて楽しい思い出が多くある庭に埋葬する。

先生の埋葬中に頭の中をあらゆる罵倒が流れる。助けられなかった自分に、何もしない神に、非情な世界に、考えられる全ての呪詛の言葉を吐く。先生の埋葬が終わっても孝は泣くことができなかった。

一方、麗達はお風呂に入っていた。麗と静香が湯船に入り冴子と沙耶が髪や身体を洗う。

「ヌルい！8禁ゲームじゃあるまいし……なんで全員でお風呂入ってるんだか」

「高城は分かっているだろう」

冴子は悪戯ツ子の眼差しでシャワーを冷水にしておもむろに沙耶にかける。

「ひゃああああー!!」

「……思ったよりいい声だな」

カラカラと笑う冴子。沙耶はそれを横目に見ながら洗面器に水を貯める。やられたらやり返す。その精神の元、冴子の背中に水をかける。

「んっ　ふっ　あっ　ッ　ふー」

「くっ　　こんな時まで姉系の反応とは」

そこには和気藹藹とした雰囲気満ちていた。だが寝室のコータは色々と限界だった。孝はコンビニ行つてくると言つて飛び出していったしガンロッカーを一人で開けねばならないしまがジンに弾込めも一人で延々と作業していた。ラジオから流れ

る情報は凄惨な事ばかりという悪循環。
リフレッシュに銃を再確認しはじめた。

SPRINGFIELD M1A1 スーパーマッチ。アメリカの
軍用M14の民生用の物。フルオート機能も省略されている。弾は
7.62ミリ弾が二十発装弾できる。銃剣もオプションにある。

KNIGHT SR 25風 ARMALITE AR 10改
アイマライトAR 10A4ロウ・エンフォースメント・カービン
をガンスミッシングしてSR 25風にした銃。スコープも付いて
おり狙撃もできる。弾は7.62ミリで二十発装弾できる。

ITHACA M37

言うに及ばずのベストセラーショットガン。これには機関部にド
ットサイトが付いている。弾は12ゲージで四発装填できる。薬室
に一発入れておけば五発。

BARNETT WILDCAT C5

分解された状態でロッカー内に入っていた。張力150ポンドのク
ロスボウ。弦を張るのにかなりの力が必要。

こんなところだろうか。やはり銃はいい。心を癒してくれる。
そんな風にコータがうつとりしていると玄関が開く音がする。

背中に泣き疲れて寝ている奈央を背負い玄関で靴を脱ぎながら奈央
について考える。

孤児院に居たときに俺が世話していた赤ん坊。生まれたばかりのコイツは孤児院の前に捨てられていたらしい。そして、その世話を俺がやらされたし名前も俺がつけた。戸籍上では先生の名字の新條と俺の名付けた名前で新條奈央だ。適当に簡単な漢字を組み合わせたらできたという本人には言えない裏事情もある。まあ、いいだろう。知らぬが仏だ。

冴子達に奈央を紹介しなければならぬ。丁度、キッチンに誰か居るようだ。和食の良い匂いが漂ってくる。

「……………へ？」

「ん？ああ、お帰り。随分と長い買い物だったな……………どうした？」

「いや……………あんたがどうした？」

キッチンに入った瞬間、間抜けな声をあげてしまう。それもそのはず、ほぼ裸エプロンの冴子が料理をしているのだ。

「ああ、これか。合うサイズのものがない。洗濯が終わるまでごまかしているだけだが……………はしたなさ過ぎたようだ。済まない」

「いや、眼福だ。先輩程の良い女だったらな」

「ふふ、ありがとう。しかし友人には冴子と呼んで欲しいよ」

「了解、冴子」

冴子は一連のやり取りの後に彼が背中になれかを背負っている事に気がついた。少女だろうか、背中まである長髪に小さな身長。それにボーイッシュな恰好。どこから見ても女の子だ。

「その子は？」

「拾った。名前は新條奈央」

あんまりにも簡潔な説明に目を丸くする冴子。更に追及しようとしたが上の寝室から騒音が聴こえてくる。

「上にちょっと行ってくる。冴子の飯は美味そうだからな。楽しみにしてる」

「うん、任せてくれ」

微笑ましい気持ちで孝を見送る冴子。この一日で彼が信頼するに足る男子だと分かっている。更には自分を良い女と……木刀を振り回す女を女子として見てくれている。それが、そこはかたく嬉しい。頬をゆるませながら冴子は料理の仕上げにとりかかった。

寝室は混沌としていた。飛び散る血に暴れるおっぱいと止めようと頑張るおっぱいがいた。

「あつ！孝！たすけて！」

コータは鼻血を吹き出し倒れており麗は静香と、組ず解れつしてお

り状況がよく分からない。

「先生が酔っ払っちゃって、平野の貞操が危ないのよ！きゃっ！」

「あゝ！こむろくんだ」

静香が麗の拘束を解き、孝に抱きついてくる。

「うお！おお……柔らかくて良い匂い」

「いい加減に……しろー！！」

孝が鼻の下をのばしているのが気に入らなかつたのか、枕を思いっきり投げる麗。頭に当たり静香は目を回して倒れこんだ。

「ほら！早く下に連れて……その子は？」

「ああ、拾った。新條奈央って言うんだ」

「ひ、拾ったって……」

麗は思い返す。今までの行動からして人一人を拾ってくるぐらいやりそうだ。ベットに奈央を置き静香を抱える孝と下のリビングへ向かう。

「ほら、孝。鼻の下のばしてないで早く運ぶ！」

「わ、分かってるよ」

静香はタオルを巻いてるだけの格好だ。その煽情的な装いは男の理

性をガリガリと削る。

どうにかリビングに静香を寝かせる。どうやら沙耶も寝ているようだ。際どい格好でソファーに横たわり寝ている姿もまた孝の理性を削る。幸運な事に後ろに立っている麗には気付かれてない。

「昨日は、普通だったのに…… たった半日で何もかもがおかしくなっちゃうなんて……」

「確かに。俺たちは普通なら自分の家にいて家族とかと過ごしてるんだろ。だが…… もしかのお話は時間の無駄だ。起きたことしか起きないのさ、人生は。それも、これも、もう関係のない話だ」

孝は振り返り吃驚する。麗が泣いていたのだ。その姿は艶麗で、だけれど切ない。孝はその涙を止めてやる言葉を持つてない。しかし泣いている姿は見たくない。

だから

麗は気付いたら孝の胸に収まっていた。強引だけど優しい抱擁。決してイヤな訳じゃない。むしろ、傷つき疲れ果てた心を癒してくれる特効薬だ。温かさに包まれ鼓動の音を聴いてると安心と高揚に満たされる。

激動の一日だった。世界は終わり永は死に、全て変わってしまった。屋上であたしを助けてくれたのも孝、正面玄関で缶をしてくれたのも孝、絶体絶命の時に駆けつけてくれたのも孝、そして今は私の心さえも救ってくれた。

もうダメだよ…… 昨日までは、半日前までは永が好きだったのに…… 今では孝の事を想っている！信じられない位、惹かれてる。でも

真っ暗な部屋の中、窓からはいる月の光に照らされながら二人は見

つめ合う。孝は麗の潤んだ瞳に、麗は孝の力強い眼差しに、吸い込まれるように口付けを交わした。

分からない。まったくもって分からない。

孝の頭の中は混乱と動揺の坩堝と化していた。孝は恋や愛という概念をいまいち理解していない。だからといって馬鹿にしている訳でもない。只、自分には縁の無いモノだと思っていた。つい、さつきまでは。

未だに麗を抱きしめながら葛藤に葛藤を重ねる。

「わんこが吠えてる？」

「ん？……近いな。少し、様子を見てくる」

名残惜しいが麗から離れ上のベランダに行く。そこには見張りのコータが険しい顔で外を視ていた。

「ヤバイよ」

たった一言。だがそれだけで通じる。スコープを覗いてるコータからショットガンを受け取り外を眺める。

P i p B o yの補助により肉眼で周りを見る。メゾネットの周りにも 奴ら はかなりいる。きつと橋から逃げてきた人々を追ってきたのだろう。必死に逃げる人々。だが 奴ら は確実に人々を腹の中に収めていく。そんな中、幼い子供を連れて逃げる初老の男性がいた。民家に助けを求めているが無駄だろう。こんな世界で人助けを進んでしたがる奴はそういない。

予想どおり断られたようだ。しかし初老の男性は退かない。何か叫んだら扉が開いた。安堵した男性が中に入ろうとした瞬間包丁を着けた即席の槍で刺された。朱に染まるシャツ。出血からして直ぐにショック死するであろうことが分かる。刺され倒れた男性に少女が近づく。

そこまでしか孝は見れなかった。隣から力チツとセーフティを外す音がしたからだ。

「おい、平野。なんで撃つんだ？」

「小さな女の子だよ!？」

「それが?その言葉はどこから出てる?青臭い正義感からか?」

「 違う!これは……あの子を助けたいの、僕の…僕のエゴだ
!」

と叫び少女に襲いかかる 奴ら を狙撃していく。
物事には流れがある。そしてその流れはもう止められない。コータが銃爪を引いた瞬間から傍観から少女の救出に思考を切り替える孝。

だが何故か表情は嬉しそうだ。

その理由はコータの発言が実に孝好みだったからだ。誰かに押しつけられた正義感や良心ではなく、自分の為に少女を救うと言ったのだ。コータは。

「お前は本当に馬鹿だな。だがいいぜ、戦友。背中を預けるに足る馬鹿だ。援護を頼んだ。俺が往く」

「……っ！分かった！」

孝がショットガンを手に玄関に向かう。コータは例えようの無い充足感に包まれながら狙撃を続ける。

僕が軍事オタクになった理由。カッコイイから、それもある。銃が、兵器が好きだから、それもある。けどもっと大きな理由がある。

僕が軍事オタクになった最大の理由は戦場での命懸けの友情談だ。

汚いゴミ山に燦然と輝く宝石のような友情に憧れた。でも、僕の周りには薄っぺらい友情しかなかった。だからだろうか、ドンドン軍事関係に嵌まっていった。いつか、ローン・レンジャーとトントのようなキモサベと呼べる友人が欲しかった。そんな中で今の事態だ。学校では友情など皆が皆、唾棄していた。僕が求めていた友情など、どこにも無かった。そんな友情はスクリーンの中にしか存在しないと諦めかけた時、アイツと、小室と合流した。普段の小室は寝ているか、本を読んでいる所しか知らなかった。だから小室の機転、勇氣、行動に驚き、嫉妬にも似た憧れを抱いた。けど……小室は、僕を、僕を戦友と呼び背中を預けると言ってくれた。僕の我が儘に友情を示してくれた。なら僕はこの銃で友情を示す。絶対に小室もあの子も死なせない。死なせてたまるか。

階段を降りていくと麗が待っていた。

「孝？」

「ちょっとガキを助けてくる」

「あたしも一緒に……」

「いや、バイクでいく。玄関を見張っておいてくれ」

「でも……」

「行かせてやれ。男子の一言なのだ」

いつの間にか階下に木刀を持った冴子がいた。相変わらずの恰好で木刀を持っているのはかなりミスマッチだ。

「悪いね。どうにも止められないし、ガキが死ぬのはあまり好きじゃない」

「そうだね。君はそういう人間だ。ここは何があっても守る。安心して行つてこい！」

凜々しく言い放つ冴子。そして奥からエアウエイトを持ってくる麗。

「孝、これも持つて行つて」

「あつ……ああ。サンキュー」

銃を受け取ったその手を包み込まれる。麗の手は柔らかくて温かか

った。ほんの少し、ほんの少しだけ銃が軽くなった気がした。

外に出てバイクに跨がりグローブを着ける。グローブは部屋を漁ったら出てきた。発注ミスか何か知らないがサイズが孝に合っていたためくすねてきたのだ。それにこのグローブはWiley XのCombat Assault Glove CAG-1だ。フルフィンガーのこのグローブは耐衝撃性や切創抵抗も高くナックルがついているタクティカルグローブだ。使わないと勿体無い。

冴子と麗が門の前に立ったのを確認してからエンジンを動かす。響き渡る駆動音と排気音。

そして門が開いた。

アクセルを全開に 奴らを飛び越えて少女の元に向かっていった。麗が門を閉めている所に沙耶がやってくる。イマイチ状況が掴めていないようだ。

「一体なんの騒ぎよ？」

「いいことがあったの」

「なによ？」

訝かしげに尋ねる沙耶に対しにこやかにはつらつと応じる麗。

「私たちはまだ人間だって分かったのよ！」

奴らが掃いて捨てる程溢れている道を走るバイク。どんなに腕が良くても 奴らを躲しながら進む事はできない。だが彼には特上のスナイパーがついている。進路上にいた 奴らの頭が吹き飛んでいく。血や脳漿で彩られた花道を走り抜ける。
見えた！あの門か。

しかし門の周りには多数の 奴ら が集まっている。

コータのスナイプも少女の方についてる。更にアクセルを開ける孝。奴らの集まりの真ん中に入り込みフロントタイヤに全荷重を掛けてブレーキをしフロントタイヤを中心に浮いたりアタイヤを360°回転させる。俗に言うジャックナイフターンだ。周りの 奴らを吹っ飛ばし悠々と庭に侵入する。

先ずは門を閉めて侵入路の閉鎖。それから 奴ら の排除だ。

「ひっ！やめてえ こないでえ あたし 悪いことなにもしてないのにい」

泣いている少女と吠えている犬は塀にまで追い詰められていた。少女は想いを吐露する。彼女の世界は狭いが暖かくて楽しい世界だったのだらう 昨日までは。今の広く、寒く、苦しい世界は彼女を無惨にも引き裂こうとしている。犬が必死に 奴ら に噛み付き止めようとするが数秒しか止められず払い除けられる。

「いやああああ！！」

迫る 奴ら に恐怖し悲鳴をあげる少女。そして彼女に噛み付こうとしたその時 顔が碎けた。

「ヘイ！ロリータ。待つてな。直ぐに掃除してやる」

近くの 奴ら にショットガンの銃床で殴りつける。後は単純作業だ。構えて撃つ。構えて撃つ。キャピタル・ウェイストランドで使っていたコンバットショットガンより耐久性は高い。が装弾数がネックだ。銃を評しながら 奴ら を屠る。

「もう大丈夫だ、ロリータ。しかしどうするかな」

門の前には 奴ら が敷き詰められたように群がっている。どうやって離脱するか悩んでいると少女に袖を引かれた。

「お兄ちゃん……パパ……死んじゃったの」

そうだな。めでたいじゃないか！赤飯でも炊いて欲しいのか？

死んだ？本当に死んだと思うか？

泣いちゃダメだ、ロリータ。笑って見送るんだ。

「どういこと？」

「お前の親父さんはお前に何も残さなかったのか？思い出、教え、何でもいい。それがお前の中に生きているのなら、親父さんは死んじやいない」

「でも……もう会えないよ……悲しいよ……寂しいよ」

「そうだな。まだ、分かんないよな。だけど、親父さんとお別れするんだ。今までありがとうって。こんな物しかないが親父さんに捧げてやれ」

花壇から取ってきた一輪の花を手渡す。必死に涙を堪え花を捧げる

少女。だが嗚咽まで隠しきれていない。

「うつ…うつ…パ…パあ…あっあああっあああ！」

孝が頭を撫でた事で限界を迎えたのか、遂に泣きだした。孝はそれを見ながら記憶の渦に沈む。

俺は、ジェファースン記念館で親父を殺された時に泣いたか？ いや、冷静に状況を判断して逃げ出した。怒りや憎しみはあったが、不思議と悲嘆はしなかった。そうだ、解っていた。俺たち、ウェイストランド人は必ず誰かに、何かに殺される。

餓えか、暴力か、渴きか、はたまたそれ以外の何か、か。俺たちは人の死を悼むにはあまりにも死に近づきすぎた。墓のある人間など数える程しかない。皆、自然に任せ土に還っていった。

死を悼む程、俺たちには余裕がなかったのだ。明日の為に泣くことを止めた俺たちには。

「……お兄ちゃん？逃げられないの？」

「ん……ああ。奴らが多すぎるな。こんだけ多すぎると並みの車じゃ駄目だな。つまり道路は無理だ」

孝が動かないのを逃げられないからと勘違いしてる少女に現状を教える。

「じゃあ、道路じゃないところから逃げればいいのに」

「道路じゃないところ……塀か。それにもう一工夫すれば」

閃いた孝は材料を探す。少女の父の遺体から手帳とライターを取る。更に庭に干してあったシャツを取り Pip Boy から取りつたけのチェリーボムを取り出す。チェリーボムは地雷にも使われる爆薬

だ。小さいながらに殺傷力や爆発もかなりのものだ。孝は嗤いながらそれらの材料を使いバイクに細工を始める。後ろに控えてた少女と犬は幸運にもその笑みを見なかった。

メゾネットの中、沙耶達もまた脱出の準備をしていた。リビングで寝ていた静香を叩き起こし、寝室で寝ていた子供は車に入れて必要な荷物を外に運ぶ。

「宮本、そこは毒島先輩に任せてあんたも手伝って！静香先生は、もついいからとりあえずなんか着て」

「あつ寒いと思ったら…」

寝惚けた静香は素っ裸のまま準備していた。なんとも素晴らしく図太い神経をお持ちのようだ。

「で、車の準備！」

「今なら車に乗り込めるな。奴らは小室君に引き付けられている」

孝のいる方を覗き込む沙耶。あまりの奴らの多さに思わず声をあげる。

「どうするつもりよ？あれじゃ、バイクを使っても戻ってこれないわ」

「なら、迎えに行つてあげるしかないんじゃない？」

静香からの思わぬ正論に場が静まる。皆、静香に目線を合わせる。

「あ、あの、先生、変な事言つた？車のキイとかはあるんだし」

「いいや、名案だ」

「てか、それしかないわ。決まりね！！小室を助けた後川向こうに脱出！！さ、準備して！」

メゾネットのベランダからスコープで孝の様子を見るコータ。

「荷物を積み込んで、小室と女の子を助けて脱出……てのは、いいけどあの数じゃハンヴィーでも……助け出すには戦車でも持ち出さない」と

もはや、スコープを覗かなくても孝の危機は分かる。 奴ら が先程よりも更に増えてるのだ。

「それとも小室がなんとかして逃げ出してくれないと……」

沙耶の合図を受けて車に向かおうとし、最後にもう一回孝のいる方

を見る。

「！なるほど……よくやるよ。小室！」

コータが驚嘆と呆れの視線を向ける先には塀の上をショットガンを首からかけて少女を背負い犬を懷に入れて走る孝がいた。まるで尻に火がついた牛のように塀の上を駆ける。だけど、なんで走っているのだらうというコータの疑問の答えは直ぐに出た。

孝たちが居た家の庭に置いたバイクが爆発したのだ。その爆発は凄まじく、半径10メートルのモノはミンチに変わる。少女の父の遺体も、奴らも、奴らを防ぐ門も、そして最後の防衛線の玄関も、だ。これが孝の施した工夫その一だ。爆音に釣られて集まる奴らと玄関と門を爆破されてパニックになる住人。

工夫その二はデコイを用いて、奴らを誘き寄せる。勿論、デコイの役は住人の皆様にやって頂く。パニック状態の彼等はさぞかし音を立てるだろう。その隙に塀を伝いメゾネットまで離脱する。これが彼の脱出プランだ。そして九割方上手くいっている。そう今の所は

「……もう一度、言ってくれ」

「おしっ」

「……我慢は？」

「えーと、無理」

「oh Jesus」

少女からのあんまりな発言に世の中の無情を噛み締めて居もしない神に祈ってしまう。だが塀の上ではどうしようもない。

「お、お兄ちゃん。も、もう我慢できないよお」

「わ、わかった。……そこでしてよし！」

「いいの？」

「ああ。……かまわない」

少女の力の抜ける声と共に生温かくなっていく背中。とりあえず孝はこの記憶を永遠に葬りさる事に決めた。現実逃避に走っていた孝の耳に車の駆動音が聞こえる。メゾネットの方の道から走ってくる車。ぼつぼつと存在する 奴ら を撥ね飛ばして孝達の前に停まる。メゾネットにあったハンヴィーだ。車体の上には冴子とルーフのオープンハッチからコータが上半身を出していた。

「川向こう行きの最終便だ。乗るかね？」

「是非とも！」

返事と共に車に飛び乗った。

こうして最初の夜から俺らは脱出した。勿論、それは悪夢のような毎日のたった一日が終わったということにすぎないのだった。そして俺らはなんとかして川を渡り家族と再会しなければならぬ

〈とある孤児院職員の手記〉

平成二十二年 四月十日

出会いと別れの季節。この時期になると今までここで暮らしていた子供達を思い出す。いい子も悪い子も居たが、やはり特筆すべきは孝君だろう。彼の武勇伝は孤児院では伝説となっている。子供達も憧れている。しかし、彼の武勇伝を実際に見た者は憧れよりも畏怖を抱いている。唯一の例外が奈央だ。四年間育てられた刷り込みで只一人親愛を抱いている。奈央にとって孝君は父なのだ。その背中を追いかけようとする奈央を必死に阻んだ。孝君は矯正できなかったが奈央は正常に育った……とは言えない。どうも女の子達に孝君と一緒に暮らすには可愛くならなきゃ駄目と吹き込まれたらしい。そのせいで見た目美少女の男の子になってしまった。

数ヶ月に一回送られてくる孝君のお母さんの手紙と孝君の写真を後生大事に持っている。特に孝君の写真は肌身離さずに、まるで恋する乙女のように持ち歩いている。

きつと気のせいよね。恋する乙女？ 違う、違う。奈央君は

男。だから孝君の写真を見て頬を染めるのは止めてほしい。

問題は山積みだけどころにか毎日を過ごしています。久しぶりの長文は疲れる。そろそろ寝るとしよう。おやすみなさい。

世界が壊れた。死人が歩き生者を貪り喰らう。まるで出来の悪い映画のようだ。襲われている人を助けようとしたら噛まれてしまった。警察の方が来なければ私は喰われていただろう。だが噛まれただけで駄目だそう。警察の方に子供達を任せて私は誰も居ない孤児院で最後を記そうと思う。

私の人生は辛く苦しく悲しい事も多かったけど決して不幸ではなかった。子供達と過ごした日々は今でも輝いているし、唯一無二の親友がいた。彼女は元気だろうか……

ああ、そろそろ苦しい。手元のナイフで首を裂けば楽になるのだろうか。でも、神の教えがそれを遮る。

なんて事だ　奈央が帰ってきてしまった　私を心配してくれたらしい　本当に優しくて芯の強い子に育ってくれた　奈央の前で死人になるわけにはいかない　奈央の前で自殺するわけにはいかない　せめて誰かが助けにきてくれるまではもたせないとそれから自殺しよう　主よ　どうか　この子に御加護を

{ VAULT DWELLER SURVIVAL GUID
 E a p e r s o n v e r s i o n }

新條奈央 AGE 11

LUCK	AGILITY	INTELLIGENCE	CHARISMA	ENDURANCE	PERCEPTION	STRENGTH
[8]	[5]	[5]	[5]	[4]	[6]	[3]

Barter	Big Guns	Energy Weapons	Explosives	Lockpick	Medicine	Melee Weapons	Repair	Science	Small Guns	Sneaking	Speech	Unarmed
[4]	[0]	[0]	[0]	[3]	[2]	[2]	[8]	[2]	[5]	[3]	[4]	[1]
[0]	[0]	[0]	[0]	[0]	[0]	[4]	[8]	[0]	[5]	[7]	[2]	[6]

オリキャラ。男の娘に需要はあるのか……際どいところだが出してみた。孤児院のアイドル的存在。最初は女の子達が悪戯心で吹き込んだ嘘だが未だに信じて女の子らしくしてる。もはや女の子らしくなりすぎてしまい思考は乙女チック。日課は孝の写真を観る事。

6（前書き）

永い時をかけてこの程度しか書けない自分の文才の無さが憎い。とりあえずどうにか書けたので上げます。誤字脱字、感想、ダメ出しなど遠慮なく言ってください。

遠い、遠い時代。

深い、深い闇の底。

暗い、暗い場所。

Vault101はいつもと変わらずに日々を送る。だが今日は違う。一年に一回のイベント、僕の誕生日だ。

朝、父さんに言われて食堂にやって来た。そうして来た食堂は真っ暗で何も見えない。一歩足を踏み入れたらパツと電灯がついた。

「サプライズ！」

「スタンリー！電気をつけるのが早すぎる。この子の目がおかしくなるじゃないか」

「誕生日おめでとう！」

電気のついた食堂には誕生日パーティーの飾りつけがされていて更にはVault101の住人達が祝ってくれる。ジュークボックスからはバースデーソングが流れてきて雰囲気が出てる。

「お誕生日おめでとう。もう十歳なんて信じられないな。お前は傲慢の息子だ……母さんが生きていたら……」

感慨深く浸っている父さんの話の途中に嫌な笑顔を浮かべた監督官が割り込んできた。

「今日がどれほど素晴らしい日か、説明の必要はないな。このVault101では十歳になると責任ある任務を与える決まりがある

んだ。さあ、監督官からこのP i p B o y 3 0 0 0をプレゼントしよう。使い方を覚えるんだぞ。君には明日から責任ある任務を授けよう」

監督官からP i p B o y 3 0 0 0を受け取り腕に着ける。それに僕は知っている。これを、修理や調整をしてくれたのが父さんとスタンリーだつて事を。この高飛車な監督官はヒエラルキーのトップに立っているがどうもいけ好かない。

「さあ、十歳の誕生日は一度きりだ。楽しんでおいで」

父さんにいわれ近くの女の子の所へいく。

「お誕生日おめでとう。ビックリしたでしょ？ふふっあなたのパパってこれがバレないか心配してたのよ。でも、大丈夫って言うておいたわ。アナタってだまされやすいのね」

だまされてないよ。知らないふりをしただけだよく嘘>

豪華なパーティーだね、アマタ！ ありがとう

これからもっと盛り上がるんだよね？

「どういたしまして。だけど本当は、あなたのパパがほとんどやったの。私は飾り付けを手伝っただけ。はい、これプレゼント」

彼女はアマタ。僕の幼なじみで監督官の娘。僕とは違う金紗の髪に翡翠の瞳、ケルト系の顔立ちの女の子だ。

彼女がプレゼントしてくれたのは　グロッグナック・ザ・バーバリアンの十四巻だ！

最高のプレゼントだ。だけどパーティーの方は最高とはいえなかった。お手伝いロボットのアンディがバスデーケーキを無茶苦茶にするわ、ガキ大将のブッチとロールケーキを賭けて殴り合いする羽目になるわ、でろくでもないパーティーだった。

今は医者のお父さんの生徒のジョナスがいる原子炉階層へ向かっている。原子炉階層はV A U L Tの重要な機関がある階だ。

「子供がここで何をしているんだ。原子炉階層へ来ちゃ駄目だろう」

「うるさい、ジョナス。それより、サプライズプレゼントはどこにあるの？」

「はは、もうすっかり一人前だな。プレゼントは先生が持ってるよ。ほら、来たぞ」

後ろから階段を降りてくる父さんがいた。後ろ手に何か持っている。

「驚く準備はできてるかい？」

ほらと渡されたのはオモチャの銃のBBガン。オモチャとは言いが殺傷力はそれなりにある。何発も撃てば人も殺せる。ガンパウダーを使っていない空気銃だ。

「よし、隣の部屋にターゲットが置いてあるそれを狙って撃ってみる」

隣の部屋に行き、ダーツの的のようなターゲットを狙って 撃つ。
レバーを引き、隣のターゲットを狙って 撃つ。レバーを引き、
更に隣のターゲットを狙って 撃つ。

「あれは……ラッドローチか。丁度いい。あれを狙うんだ」

ターゲットへの着弾の音に驚いた馬鹿でかいゴキブリが僕に迫ってくる。冷静に慎重に頭を狙う。初めての殺し合い。外したら殺される。少なくとも僕はそう思った。

バシユッと空気の抜ける音とビチャツと体液の弾ける音。狙い通りに着弾し頭が潰れたラッドローチ。

十歳の誕生日、僕はたくさんモノを得て大事なナニかを失った。

「よし、上手いぞ。これでアイツらも一匹減ったな。ジョナス、この凄腕ハンターとの写真を撮ってくれ」

「よしきた！ ほら、そこに並んで、並んで」

ジョナスに言われて、父さんと並ぶ。

僕は……今笑えてるのだろうか。

自分でもよく分からない曖昧な表情のまま、カメラのフラッシュに包まれた。

時間が熔ける。 塵気楼のように

六年後……

「私の見た限りだと、とても健康な十六歳の男子だな。つまり、授業に出てG・O・A・T・試験を受ける必要があるってことだ！さあ、行っておいで。G・O・A・T・を受けるんだよ」

「……行きたくないけど、仕方ないよね。じゃあまた、父さん」

Vaultには悪しき習慣が多々ある。その内の一つがG・O・A・T・試験だ。正しくは、Generalized Occupational Aptitude Testだ。要は一般職業適正テストのこと。Vaultでは十六歳になるとG・O・A・T・試験を受けなければならないが、この試験はまったくあてにならない。だから、サボる為に父の居る医務室に行ったがあっけなく看破されてしまった。

仕方なく教室に向かっていると廊下で誰かが言い争っている。アマタとブッチの莫迦とその仲間だ。

アマタは監督官の娘であり更に十六歳になってハツとする程の美人になったのでよく絡まれる。それを助けるのは幼なじみの僕の仕事だ。威嚇するように笑いながら近づく。

「ブッチ。まだ懲りてないのか？ 次は鼻血じゃ済まさない」

「あ！ ちつ、ま、またテメエか。興醒めだぜ。行くぞトンネルスネーク！」

トンネルスネーク最強！と叫びながら教室に入って行ったブッチ達。

「ありがとう。あいつら、本当に馬鹿よね。私が監督官の娘だからって……何で放っておいてくれないのかしら」

「阿呆だからね。気にしないほうがいい」

不機嫌に愚痴るアマタと一緒に教室に入っていく。

Vaultには木材が殆ど使われてない。勿論廊下も自室も教室もまるで温かみが無い。壁は金属、天井も金属、床も金属。ひどく寒々しいこの場所が僕達の揺りかごであり棺桶である。そして死ぬまで続ける仕事を決めるG・O・A・T。試験はあまりに馬鹿馬鹿しい問題ばかりだ。

例えば、おばあちゃんからお茶に招かれました。が、行ってみると、ピストルを渡されて、Vaultの住人を殺せと言われました。どうしますか？

おばあちゃんの命令に従い、ピストルでターゲットを殺す。

一番大切なものを差し出して、殺しをやめさせる。

しくじりたくないので、ミニガンに換えてくれと頼む。

おばあちゃんの顔にお茶をかける。

このような、頭のイカれた問題ばかりだ。適当に答えてMrブロッチに提出しテストを見て結果を教えてください。どうやら僕の職業は当直官らしい。監督官コースに進み未来の監督官　アマタの右腕役となるべく鍛えられるらしい。

まあ、アマタの助けになるならそれでいいや。

そう結論をだしアマタと昼食を食べに食堂へ向かった。

時間が熔ける。まるで蜃気楼のように

三年後……

「起きて、ねえ、起きて！」

「ん……なんだよ、アマタ。まだ眠いんだ」

昨日も当直官の仕事をこなしへとへとそのまま自室のベットに倒れこんだ。今日は非番だから惰眠を貪ろうと思っていたがこの様だ。

「いいから、起きて！　あなたのお父さんがVaultを脱け出したの！」

「と、父さんが？　そんな……嘘だ」

「本当よ。それに……ジョナスがガードに殺されたわ。きっと次はあなたよ。だから早く逃げないと」

「逃げる……わ、分かった。でも、何処に？」

アマタの表情が辛そうに何か言いにくそうに変わる。それをみて大体悟った。つまり外へ行かねばならないのだ。

「外よ。お父さんを追いかけるほうが安全だと思うし……今、父は怒り狂ってる。だからエントランスを通るのは無理よ。父のオフィスから出口に繋がる秘密のトンネルがあるの。そこから出れば

多分大丈夫」

「うん、分かった。それで行こう」

「それじゃあ出口で落ち合いましょう。あとこれ。父の銃よ。あなたが使って」「ありがとう、アマタ。いざというときに使わせてもらうよ」

「ええ、気をつけて」

アマタの差し出した銃を手に取り眺める。

只のハンドガン。トリガーを引けば10?の弾丸を吐き出し全てを傷つける。僕にはまだ撃てない。覚悟がない。勇気もない。

ただど丸腰で逃げられるだろうか。……無理だ。

相手は既にジョナスを殺している。同じ様に僕を殺すだろう。慈悲も躊躇もなく殺しにくる。

頭の中は怒りと恐怖でぐちゃぐちゃで、躁鬱の躁の状態だ。銃やBガン等をP i p B o yに納めてバットを握って部屋を出る。

「見つけたぞ!」

「待ってくれオフィサーケンダル! 僕は」

「黙れ! 貴様等を殺せばボーナスだ。ジョナスは、マックの奴が殺したからな。お前には、俺のボーナスになってもらう」

その言葉を聞いた瞬間、頭の中で必死に抑圧していた何かがブツツと切れる音がした。

ジョナスをそんな理由で、殺したのか!

だったら、お前も……お前も!!

警棒を構えて走ってくるケンダルにバットで応戦する。

攻撃が届くよりも先にフルスイングしたバットが頭に当たり吹き飛んだ。

吹き飛んだケンダルに何度も、何度も、バットを振り下ろしセキユリティアーマーとヘルメットを叩き割る。それでもまだ止めない。いつの間にかバットは折れて僕は血塗れになってケンダルだったモノの前に立っていた。

だがこの胸を焦がすのは罪悪感でも後悔でもない。

憎悪だ。

僕の中に荒れ狂う激情が叫ぶ。

監督官を　アルフォンス・アルモダルを殺せ！！　ステイプ・マックを殺せ！！

裡から湧き上がる衝動に身を任せ走り出す。

走る、走る。

ブッチが話しかけてきたが殴り飛ばした。

走る、走る。

話しかけてくる全てを無視してアトリウムを駆け抜ける。

走る、走る。

ラッドローチを踏みにじり散乱としている部屋へと入る。

脚が停まった。

ジョナスだ。ジョナスだったモノが倒れている。全身が殴打された為に内出血で膨れあがり見る影もない。

頭が急速に冷えていく。まるで熱して鍛えた刀を水に浸けた時のように急激に醒めていく。胸には未だに激情が滾るが頭は冷えた。

散乱した部屋に落ちているジョナスが外に出た時の為に用意していた装備を回収して再び寒々とした廊下を駆けていく。

「奴は何処に行った！ 言え！ 言うんだアマタ」

「知らないわ！ それに彼が何をしたっていうの！？」

「監督官。尋問ならば私にお任せを」

目的地の監督官のオフィスの手前、警備室から怒鳴り声が響いてくる。

アマタとステイプ・マックとアルフォンス・アルモバルの声。
するべき事は一つ。至ってシンプル。
奴等を殺す。

だけど、それはアマタとの決別を意味する。アマタは父を殺した僕を赦すだろうか。いや決して赦さないだろう。

元々、僕はトンネルスネークのやつらに苛められていた。父にも言えず泣きながら耐え忍ぶ毎日を助けてくれたのはアマタだけだった。しかし、いつまでも助けてもらえる訳じゃない。相手は男でしかも複数。いつかアマタもひどい目に遭わされるんじゃないかと不安になった。

だから僕は自分を鍛えた。殴られたら殴り返し、蹴られたら蹴り返し、罵られたら嘲笑ってやった。

アマタがいたから僕は強くなれた。

アマタがいたから僕は前に進めた。

アマタのおかげで僕は生きている。

今度は僕がアマタを守ろうと、ずっと笑顔でいて欲しいと誓ったの

に、彼女の父を殺す。

なんたる矛盾だろうか。でも、ジョナスには義理が……恩があった。義理や恩を忘れる自分が嫌だから殺す。他の誰の為でもない己の為に。

P i p - B o yから銃を出しセーフティを外す。皮肉にもアマタからもらった銃を使う事になった。

「埒があかないな。オフィサーマック……頼んだぞ」

「はい！ 監督官お任せください」

呼吸を整え、必滅の殺意を滾らせてドアを開ける。

「な！ き、きさ ぎゃ！」

振り向いたマックの頭に銃口を向ける。そして銃爪を二度引き絞る。一発は耳をこそぎ落とし、もう一発は瞼を穿ち脳天まで達しただろう。後は監督官を

「待つて！ 待つて……お願い。父を……父を撃たないで！」

監督官との射線にアマタが立ち塞がる。

「どいて……アマタ」

「駄目、駄目よ。おかしい、こんなおかしいわよ。なんで」

「おかしい？ 確かに僕はおかしい。そうだね、君が正しいんだ

ろう。だけどこのVaultに正しい人はきつと君しか居ない。ならばおかしいのは君だよ、アマタ」

「ジョナスは！　こんな事は望んで無い筈よ……」

「別にジョナスの為じゃない。僕は僕の心の為に撃つんだ」

「退いていなさい、アマタ。君は何をしたのか分かっているのかね？　このVault101の安全を脅かし栄えあるオフィサーを殺したのだ！　今すぐ武器をこちらに渡したまえ。なに、悪い様にはしない」

アマタをさがらせ、いつもの嫌な笑みを浮かべ前へ出てくる。

ああ、よかった。安心した。

ここでアマタの父親らしい事をされたら撃てなかった。
これで心置きなく　殺せる。

「くたばれ、糞野郎」

鳴り響く銃声。

アマタの慟哭と怨嗟の声を背に部屋を出た。

この日、キャピタル・ウエイストランドに旅人が一人増えた。

怨嗟と硝煙の渦巻く地獄の世界へ踏み出した愚かな男。そんな男の旅立ちの記憶。

日も昇り清々しい朝。学生服と女の子のパンツを旗めかせハンヴィーは川を渡っていた。ルーフでは少女とコータが歌い、オープンハッチからは沙耶が双眼鏡で向かい側を索敵し車内では孝を中心に麗と冴子が寝ており、静香は慣れない車の運転に集中し、奈央は銃を見ている。

孝に渡された銃。エアウエイトの使い方を何度も反復する。もう僕は、子供ではいられない。昨日、父様をお願いした。僕も戦いたいと、我が儘を言ってしまった。怒られると思ったけど困った様に笑いながら銃を渡して使い方を教えてくれた。父様曰く引き金を引く時は勇気が教えてくれるらしい。

だから、僕は僕の勇気を信じて銃を握る。いつか父様の背中に追いつける様に母様が天国で誇れる様に

「みんな起きて！　そろそろ渡りきっちゃう！」

静香の声でまず麗が起きた。孝の身体にもたれ掛かる様に寝ていた彼女は、最初に孝の顔を確認する。スヤスヤと寝ているその顔は、昨日の屈強な男と同一人物とは思えない。そんな風に微笑ましく眺めていたが、視線が下にずれた瞬間に険しくなった。

敵だ。分かる。　奴ら　なんかより何倍も厄介な敵。

孝の膝にもたれる様に寝ている毒島冴子。その寝顔は安らいでいる。女の勘がガンガン警鐘を鳴らす。今は未だ信頼している男ぐらいだろうが、いつ男女のそういう想いになるか分からない。恋はいつも突然なのだ。

嫉妬と焦燥に駆られて孝を起こす。思いつきり頬をつねるという荒々しいやり方で。

「ぐおあ！」

勿論、やられた方はたまったものじゃない。例外なく孝も跳び起きた。

「いいご身分じゃない」

「なにが……」

ハツと視線を下に向ける。そこには寝起きの冴子がいた。寝惚け眼で涎を垂らしぼつと無防備な顔。共に夜を過ごした者しか観る事ができない艶やかな顔。

「あー、冴子。おはよう」

「ヨダレ、垂れてますよっ」

麗の言葉にハッキリと目を覚ましたのだらう。冴子は慌てて口許を拭う。顔を恥じらいで染めてうつむいている冴子を横目に孝はマイペースに外を見て言う。

「さあて、降りるか」

「なんでよ？」

「堤防を登らないといけないだろ」

川辺には敵影はない。その為、下車は楽に行えた。

「小室、手伝ってくれ。ありすちゃんを降ろす」

「ああ」

「あの、あの、あの」

少女　　ありすをコータから受け取ろうとした孝だが彼女は顔を赤らめスカートを押さえ、そして小さな声でおぼんつ……と囁く。いくら鈍感とはいえこれは流石に気付く。ピタツと止まった孝とコータ。

その二人からありすを強奪した麗は凄んで言う。

「これだから男子は……あたしたちも着替えるからこっち見ないでよ！」

コータと孝は顔を見合わせ奈央を連れて着替えが見えないハンヴィーの死角に廻る。

「あのな、奈央。あの娘、希里ありすちゃんはお前が守れ」

「え？　で、でも僕は……」

「言い訳はいらない。やるか、やらないかだ」

孝は追い詰める様に話はこれまでだと言わんばかりにコータの方を向く。

「う、う……やります！　　あの子を、ありすちゃんを守ります！」

「なら、行動で示すんだな」

奈央は元気良く返事をしハンヴィーに入って行った。多分、エアウエイトを取りに行ったのだろう。

「随分な事を言うね」

「そうでもない。知ってるか？　世の中二種類の人間がいるんだ」

「さあ？　服を着ている人と着ていない人、とか？」

孝はやれやれと肩を竦め、皮肉な笑みを浮かべコータに答える。

「もっと根源的なものさ。守る者と壊す者。前者が多いほど世界は停滞し、後者が多いほど世界は加速する」

「なら、奈央君は前者なんだ？」

「まあな。あの馬鹿は人の為に動けるお人好しだからな。重りを着けとかなないと危なっかしくてしょうがない」

二人してくつくつと笑っていると孝の足下に犬が来た。姿形は似てないが眼が似ている。勇気あるモノの眼だ。諦めずただ主の為に戦った眼。

初めて会ったドッグミートを彷彿とさせる。

「よし、お前の名前はドッグミートだ」

「……正気？　犬肉はいくらなんでも酷いと」

ワンッ！！　ワンッ！！

コータの言葉を遮る様に犬が吠える。尻尾をふり、喜んでいる様子

にコータも口をつぐむ。

「よし、いい子だドッグミート」

ワンッ！

ご機嫌な一匹と一人。その手に銃を持っていなかったらとても平和な一幕だろう。

「おにいちゃん！」

「へえ……」

「小室、どうしたっての……！！」

コータと孝は絶句し見つめる。

そこには着替えた彼女達がいた。

ハーフトップにジャケットを着てミニスカートを履いた沙耶。

上は制服で下が深いスリットが入ったスカートにガーターを着け、ソールの高いブーツを履いた冴子。

制服だが肘や膝にプロテクターを着けてハーフフィンガーグローブを装着し、M1A1 スーパーマッチを装備している。

「ははっ！ カラミティ・ジェーンも裸足で逃げ出すな。けど、撃てんのか、それ？」

「平野君に教えてもらっし、いざとなったら槍代わりに使うわ」

「あ、使える使える使えます。それ軍用の銃剣装置ついてるし、銃剣もあるから」

麗のスーパーマツチに銃剣を着けて、戦闘準備は完了した。孝とコータは先行して堤防をのぼる。

そこには敵影はなく只、遠くに黒い煙が立ち上っていた。

「クリア！」

「こっちもクリア。 奴ら はいない！」

孝は手を振って安全な事を伝える。そしてハンヴィーが動き出す。ハンヴィーは勢い良く跳ねる様に堤防を駆け上がる。平野の知識にあるハンヴィーでは無理な筈の機動を静香はあっさりしてのけた。沙耶達も堤防をのぼり双眼鏡で更に詳しく周囲を確認する。

「川で阻止できたわけじゃないみたいね」

「世界中が同じだとニュースで伝えていた」

「でも、警察が残っていたら、きっと」

沙耶が 奴ら が起こした惨状の痕跡を見てポツリと現実を呟く。冴子は淡々と事実を述べ、麗が微かな希望を口にする。

だが、沙耶の聡明な頭脳は即座に警察と自衛隊ではここまで手が回らないだろうと結論付けた。

しかし、それを口に出してはいけないとぐつと堪える。ここで絶望的な意見を出したところで易はない。

「そうね。日本のお巡りさんは仕事熱心だから」

「うん……うん！」

麗の顔が晴れていくのを見ながら、沙耶は己が明晰さを恨んだ。

考えれば考える程に詰んでいく。

なるほど、世界は破滅したのだ、で終わらない。

世界が破滅したとしても、まだ、私たちは生きている。

ママもパパも、きっと生きている。

だからこそ、考え続ける。

この地獄で生き残る方法と往くべき路を思い続けよう。

先ずは原因。

コレが判明すれば、対処する手段が見つかるかもしれない。

だけど、それには充実した設備と専門家が必要だ。つまり、後回し。今の戦力。

宮本と先輩は文句なしの前衛で平野は後衛。あのちびっこ達と先生は戦力外。

しかし、このメンバーを以ってしても、なお異常と言える小室。

まるで、そう、まるで慣れているような雰囲気醸し出している。

奈央と先輩から聞いた話だと昨日だけで二人、人を殺している。

その内の一人は、育ての親みたいなものだったらしいけど……本人に悲観的な言動や表情も出ていない。

最初は、信じられないぐらいタフネスなのかと思ったが違う。

彼だけバックグラウンドが全く見えてこないのだ。

宮本は銃術部、先輩は剣道部、平野は外国で銃の取り扱いを学んだ。なら、小室は？

教室では暗くもなく、明るくもなく、軽くもなく、重くもない。

言うなれば、空気のような、普通を体言した存在だった。

その彼が、レンジャー部隊の様な事を軽々としてのけた。

極めつけは腕の不思議な機械だ。本人に色々訊ねたが全てはぐらかされた。

正直、推理するにはピースが足りない。

まあ、悪い奴じゃないみたいだし

「ぎさん！　高城さん！」

「へ？」

「へ？　じゃないわよお。これからどうするのかを聞こうと思ったら、難しい顔してるんだもの」

「聞いた感じじゃ高城の家が一番近いんだ。道案内、よろしく」

「え、ええ！　任せなさい！」

閑静な住宅地をハンヴィーが走りぬける。
孝は麗と共にルーフの後部に座り雪の様に舞い落ちる桜の花に見惚れていた。

「ね、孝！　気づいてる？」

「何が？」

「あたしたち……夜が明けてからまだ一度も出くわしていないわ」

「そう……だな」

孝は空を見上げて、もう一つの事実を確かめる。昨日、大量に飛び回っていたヘリや旅客機が一機も見えない、ということ。

「奴ら です！ 距離右前方三百！」

「わっ！ ここも！ もついやっ」

「じゃあそこ左、左よ！」

高城の家へ近づくにつれて 奴ら の数が増していく。沙耶の案内のもと、 奴ら を避けながら進む。

「このまま押し退けて！！」

遂には避けきれなくなり無理矢理突っ込んでいく。孝と麗はハンヴィーのルーフに伏せて衝撃に備える。

その時、麗の目にあるものが写りこんだ。

「だめよ、だめ……停めてええ！！」

「え？」

「ワイヤーが張られている！ 車体を横に向ける！！」

進路に幾重にも張られたワイヤーが道路を封鎖している。静香は冴子の指示どおりハンドルの切り、ハンヴィーを滑る様に横に向ける。ギヤリギヤリッとタイヤが悲鳴をあげてワイヤーと車体の間にいた 奴ら をズタズタに押し切る。

「滑り過ぎてる！」

「停まって！　なんで停まらないの！」

「人肉、いや、血脂で滑ってるのよ！！」

「先生！　タイヤがロックしてます！　ブレーキ放して少しだけアクセルを踏んで！！」

「え？　ええ！」

急な発進と急な停止に慣性が働く。乗り物に慣れてない孝は不運にも中腰のまま戦闘準備をしていた。ふわつとした浮遊感の後に鈍く響く音。

「あゝ　がっ」

「うぐっ」

麗はエンジンルームに背中から打ち付けられ道路に落ち、孝は前方にある電柱に頭を打ち付ける。

如何にタフな人間でも頭は弱点である。そこを思いきり打ち付けた孝は立つことも覚束ない。

麗も受け身を上手くとれなかったのか寝転んだ状態から動けない。更に車の音に釣られて大量の　奴ら　が迫ってくる。状況をいの一に把握した車内の沙耶が動く。

「先輩と平野！　援護して！！　ちびっこ達は待機！」

「ああ！」

「はい！」

コータがルーフから狙撃し、冴子が叩きつけ血路を拓く。

沙耶は孝のもとへ向かう。そしてショットガンを拾いフォアエンドをスライドさせる。

「死なせるもんですか！ 誰も死なせるもんですか！ ……ア
タシの家はすぐそこなのよ！！」

一方、車内では

「なんで！？ エンストしてからエンジンが掛からない！！
奈央君、何をするつもり！？」

「……外にでます」

「ダメよ！ 危ないわ！」

奈央はグルツと辺りを見回す。犬を抱きしめて震えるありす、窓の外からは銃声が轟く。

「奈央ちゃん。行っちゃうの？」

「うん……大丈夫だよありすちゃん！ 絶対に誰も死なない。僕
たちには最高のヒーローがいるんだからね」

「それって、孝お兄ちゃんの事？」

「うん、でもね。そのヒーローは困ってる人を助けるんじゃないん

だよ。苦しくても、辛くても、それでも諦めない人を助けるんだ。
だから、ありすちゃんも諦めないで、ね？」

「う、うん！　ありす諦めないよ！」

「いい子だ」

奈央はありすに優しく微笑みかけて外へ飛び出していく。その暖かくて柔らかな微笑みは確かに母から受け継いだ微笑みだった。

まるで乗り物酔いと酒に酔ったのを足して二乗したような気持ちわるさ。攪拌された脳は役割を放棄したかのようだ。

身体は動かない。戦えない。
突如慣れ親しんだ感覚に襲われる。身体に染み透るその感情の名は絶望。

呑み込まれる　その瞬間、頭に響く声。

新しきV a u l tの英雄よ　声が聴こえるか　まだ死んではならない　君の役割は終わっていない

脳裏に響く声音に聞き覚えはないが、強い意志と意思を感じる。
その声に対し孝は声も無く叫ぶ。

どうしろってんだ！　俺はな　マーヴェルか何かの雑誌から飛び出してきたヒーローじゃないんだよ！！

英雄よ　何故立てないのか　それは君の心が知っている　周りを見るのだ

くそっ 結局は根性論かよ それに立っても何も出来ねえよ！

力か ならば最も古い戦友に頼るがいい きっと君の求める力を貸してくれる

なっ

時 が い で待って パス は伝説の終地だ

それきり声は聴こえなくなった。代わりにガシャツというマガジンが落ちる音が聞こえる。先程まで聞こえていた銃声や衝撃音がしない。沙耶は麗の前に立ち項垂れている。冴子は木刀を奪われたのか徒手空拳で構えをとっている。奈央は必死に走り回り囃を務めたのだろう。足が震えフラフラしている。

コータは

「よいしょっ」と

「コータちゃん……」

ルーフのハッチからありすを抱き上げるコータはなるべく明るく語りかける。

「さあ、ワンコと一緒にワイヤーの向こうへジャンプだ！」

「でも、みんなは？」

「みんな、すぐに行くから！」

「うそ！」

「え？」

「パパも死んじゃう時にコータちゃんと同じ顔したもん！　大丈夫っていったのに死んじゃったもん！！　いやいやいやいや！　ありす一人はいや！　コータちゃんや奈央ちゃんや孝お兄ちゃんやお姉ちゃんたちと一緒にいる！　ずっとずっと一緒にいる！　涙を溢しながらみせる子供の無邪気さと健気さにコータの表情も曇る。しかし心を鬼にしありすをワイヤーの向こうへ投げ

「あゝ、あゝ　あああああ！」

思わずコータの手が止まる。その叫びは最後方　孝が倒れている場所から聞こえてきた。

全ての視線がそこに集まる。そこには物々しい装備の孝がいた。背にバッテリーを背負い両手で腰溜めに構える銃。回転式バレルが特徴のミニガンを携える左腕の Pip Boy からは煙が立ち上っている。

最も古い戦友　Pip Boy は孝の願いに答えた。限界を超え機能を止めそれでも叩き出した奇跡のミニガン。駆動音と共にバレルが回転を始める。

血と鉄の嵐が吹き荒れる。

轟音と伴にバレルから吐き出される5ミリ弾が次々と　奴ら　を砕いていく。

僅か数分で道路上は肉塊と血に埋めつくされ動く　奴ら　はいない。しかし、場に安堵の空気は流れない。流れるのは畏怖と疑念の空気。

恐怖にまみれた視線を一身に受け孝は無言でゆつくりと前のめりに倒れていく。

その目には駆け寄ってくる奈央とブラックアウトした筈のPip Boyの画面に、一瞬だけ映ったVault Boyの誇らしげな笑顔だけが焼き付いた

新しいPERKSを手に入れました。

OLD BUDDY NEVER DIE

最大ランク：1

条件：大切な相棒を失う

友は戦場を去った。貴方は一人になった？
いいえ、旧き友は去ってなお貴方と共に在り力を与えます。友の加護によりLuckが2上がります。旧き戦友は決して死なない

7（前書き）

文才が欲しい……とりあえず芥川の本でも食べれば文才は強化されるのだろうか……

すいません。作者は自分の余りの駄文具合に発狂しておりました。ですが……こんな駄作をお気に入り登録してくださった方々のおかげでゲシュタルト崩壊せずにすみました。しかしそのうち全話書き直したいなと思っています。

相変わらずの駄文ですが読んでいただけたら幸いです。

あれから一日が経った高級住宅地の一画。大きな庭園に立派な門、豪邸と呼ぶにふさわしい高城邸には活気が溢れそこが安全な事を示している。

その高城邸の一室に孝と奈央以外のメンバーと沙耶の母の百合子が集まっていた。

例のミニガンを部屋の中央の机に置き、それを一日がかりで調べ上げたコータは分かった事を説明し始めた。

「まずこれは、その、古いけど新しい銃です」

「それはどういう事よ？」

なんとも矛盾したコータの説明に疑問の声をあげる沙耶。しかしそうとしか言えない。銃好きのコータでさえ見たことのないミニガン。しかし何処かの国の極秘に開発された兵器というには幾分ボロい。

「既存のミニガンは持ち運びできません。弾薬も含めたらとんでもない重さになりますから。この例のミニガンはマイクロガンより軽い。今の技術では無理です」

「じゃあ、何が古いの？」

「見た感じ何度も部品を取り替えたようですし銃に刻まれる筈のシリアルナンバーの部分が摩り減ってます。少なくとも製作から百年以上は前かと……」

コータと沙耶の問答をBGMにそれぞれが思考に沈む。ありすだけ

はベットに寝そべっている麗の横でドッグミートと遊んでいる。ありすと百合子以外の全員があの血と鉄の嵐が吹き荒ぶ光景を見たのだ。映画でも漫画でもなく現実で起こったその光景は時に屈強な兵士の心さえ折る。後から来た大人たちはその惨状を見て精神を病んだ者さえいた。

それに反して彼女たちはたった一日で軟弱な日本人を逸脱した。これは才能だろう。日常ではまったく必要ない才能であるが非日常では強力な武器になる。

「沙耶ちゃん、結局は本人に聞いたほうがいいと思うわ。そろそろ起きたでしょうしね」

「ママ、ええ。そうね」

百合子が沈黙を破り沙耶はかぶりを振りながら応える。一抹の不安を振り切るように肩を怒らせ風を切るように歩く沙耶を先頭に彼女達は部屋をでていく。コータ、百合子、ありすとドッグミート、静香が麗を支えながら部屋を出ていく。

「……」

部屋を最後に出た冴子の様子がおかしい事に気付いた者はいなかった。

孝がいる部屋の前で停止する一団。先頭の沙耶が意を決してドアを開ける。

部屋の中に踏み込んだ彼女達を出迎えたのはは椅子に座って外をぼーっと視ている奈央だった。

「……ちびっこ、小室は？」

「父様は腹減ったって言うてどこかに行っちゃいました」

「はぁ……どれくらい前に？」

「んー 一時間ぐらい前です」

沙耶が何か言おうとする前に彼女たちが入ってきたドアが開いた。全員振り向くと黒いジャケットを羽織った孝が佇んでいる。黒いジヤケットはどこから頂戴してきたのだろう。仕立ての良いテーラードジャケットを着崩して細めのスラックスを履いている。彼が一步進むと全員が一步退き、さっと道ができる。退かなかったのは百合子のみだ。

「貴方が小室孝君？」

「ヤー、そういう貴女は？ マダム」

百合子は飄げて言う孝ににこやかに答える。だがその瞳は油断無く孝を見据えていた。百合子には孝がただの高校生には見えなかった。だが軍人ではない。どちらかといえば傭兵かテロリストの類いだろうか。

「私は高城沙耶の母親の高城百合子です。この度は私の娘を守ってくださいありがとうございます」

「おいおい、よしてくれ。俺はやるべきを為したただけだ」

孝は頭を下げる百合子を制止し頭を上げさせるが彼女はその時に気付いた。彼の左脇が膨らんでいる事に。

しかし、その疑問を問うことはできなかった。間髪を入れず沙耶が孝の前に躍り出た為だ。

「小室、訊きたい事があるの。アンタの事を説明して欲しいわ」

「結構、恐い話だぜ。夜、寝る時にベットの下が恐ろしくて寝れなくなっちまうけど？」

子供に怖い事を聴かせるかのような孝の飄げた言い方は沙耶の癪に触った。思わず沙耶の口調が激しくなる。

「真面目に話してよ！　　アタシはアンタに何度も助けられた！
アタシは何も知らずにアンタを拒絶したくないの！」

「慌てんなよ。話すが信じるかはお前らの勝手だ」

孝は椅子でうとうとしている奈央をベットに寝かし付け椅子に座る。そして全員を一瞥し高らかに謳うように話しだす。まるでお伽噺のように

「俺は遙かな未来、2277年位からやって来た。いや、やって来たと言うよりは無理矢理飛ばされたかな」

それはあまりにも突飛な発言だった。皆、己の耳を疑い絶句するが孝は構わずに自嘲しながら続ける。

「俺が生きた未来は2077年に大規模な核戦争がおきて世界が破滅した。数少ない人々がVaultと呼ばれるシエルターに逃げ込み難を逃れた。俺はその200年後の世界に生まれVaultで育ったんだ」

「待つて、もし、未来から来たのならその未来に今回の事は？」

「記録には全くない。新ペストが流行ったり似たようなものもいたがこの時代には存在していなかった筈だ。……酷い世界だったよ。力がないと生きる事すら許されない。俺は旅人だったから尚更な」

いち早く混乱から回復した沙耶の頭脳が回る。未来から来たですって？ 信じられない。けど、辻褄は合う。死人が動く世界に今までの常識は通じないのかもしれない。

常識を含めないで考えたら何が起ころうと納得できる。つまり幻想や誇大妄想を否定出来なくなる。何故ならアタシたちが幻想と誇大妄想と思っていた事が既に現実で発生しているのだ。ありえないなんて事はない。

「それで、アンタはどうやって来たの？」

「分からない。死んだと思ったらガキになってこの世界にいた」

少し整理しよう。小室はありえた未来からやって来た。どうやって来たのか分からないが死んだと思ったら子供になっていた。オマケにその未来はとんでもなく危険らしい。

……十中八九小室の世界が原因な気がする。そうじゃなければこんなに大規模なパンデミックが起きるはずがない。

「アンタ、このパンデミックに心当たりがあるんじゃないの？」

「悪いがこんなに繁殖力の高いゾンビはいなかった」

「それじゃ、最後にあの銃はどうやって？」

「こいつ、P i p B o yの機能だ。とは言っても故障していたのに無理させたからな。もう使えない」

沙耶は孝が腕に付いている機械を指差すのを見て自然と安堵の息を洩らしてしまう。

なるほど大体は分かった。これで小室を拒絶しないで済む。相互理解とまでいかないが彼の人柄は大体分かっているしもしかするとこの世界で一番頼りになるかもしれない。

沙耶の頭脳はそう結論付けた。

「沙耶ちゃん。私ももう少し色々訊きたいけど、壮一郎さんの出迎えにいくわ。皆様、失礼します」

黙って聞いていた百合子が優美に礼をし部屋を出ていく。その胸の裡は判らない。孝の話を信用したのかさえその表情からは伺えない。唯一つはつきりしたのは小室孝は常人ではないという事だけだった。部屋の空気はどことなく軽くなり孝はまだ少しぎこちないコータや静香や麗の質問に答えている。奈央は孝のベットでぐっすり眠っている。

「さて、皆、アタシたち一度話し合っておくべきことがあると思う」

「それで、どういいうお話しなの？」

「アタシたちが、これから先も仲間にいるかどうかよ」

「仲間って」

唐突な問いに思わず麗が声を上げて孝が答える。

「俺たちは結束の強い大グループに合流した形だしな」

「そう、選択肢は二つきり！　飲み込まれるか……」

「悪いが、おれは別れるよ。育ての親を助けに行かないといけないしな」

「私も、孝と一緒に行くわ。東署は通り道だし家も近所みたいだしね」

孝と麗は早々に結論を出し告げた。孝は言葉どうりに、麗は孝についていくと決めていた。例え孝が何者であろうと抱きしめられた温もりを優しさを知っている。それだけで信じるには充分だった。ふとコータが外の騒音に気付く。

「車の音、ですかね」

「帰ってきたのね」

全員で庭園が見えるテラスに出ると庭園にタンク車にトラック、二輪車、四輪車が続々と入ってきた。

「あれがこの県の国粋右翼の首領！　正邪の割合を自分だけで決めてきた男！」

憂国一心会と書かれた車から一人の男が降りてくる。巖のような肉体にたたずまいから醸し出す確固たる意志。その眼差しは熱く激しい。

「アタシのパパ！」

「うへえ、あれとは合わないな。右翼だけで嫌いだがね」

「パパは三島由紀夫も真つ青の思想右翼よ？」

「俺の親父、前の世界のだがな。右翼のクソに殺されたんだよ。俺も随分な目にあつた　なにしてんだ？」

庭園に人が集まり、演説用の台が用意されている。そこに沙耶の父が立った。更にフォークリフトで　奴ら　と化した男の入った籠を運んでいる。

「この男の名は土井哲太郎。四半世紀もの間共に活動してきた我が同志であり友だ！　救出活動のさなか、部下を救おうとし……噛まれた！」

フォークリフトが演説用の台に籠をピタリと着けた。

「まさに自己犠牲！　人間として最も高貴な行為だ！！　しかし……彼はもはや人間ではない。ただひたすらに危険な“モノ”へとなり果てた！」

壮一郎が静かに腰の刀を抜きさり構える。全てを断ち切るかの様に煌めく胴田貫。

「だからこそ、私は今……我が友へ最後の友情を示す！！」

籠が開き既に 奴ら と化したそれは右手を突き出し彼に喰いつこうと進む。

だが一太刀。

上段からの一太刀で首と腕を切り離されて動きを止めた。

庭園に集まった一般人たちは愕然と目を見開きソレを見つめる。咳の一つも聞こえない沈黙が流れる。

「さらばだ……友よ！！」

咆吼と共に友だったモノの頭部を踏みつけ、肉と骨の碎ける音と共に高らかと壮一郎は宣言する。

「……これこそが、我々の“いま”なのだ！！ 素晴らしい友、愛する家族、恋人だった“モノ”でも躊躇わずに倒さねばならない！！ 生き残りたくば……戦え！！」

誰も彼もが声をあげない中、孝たちのいるテラスだけは普通にしていた。中世に流行った処刑を観てもショックは少ない。もっと激しく劇的な大量銃殺を目の当たりしたからだろう。孝は暢気に壮一郎の剣腕を評した。

「いい腕だ。ジンウェイ將軍を思い出すな」

「……刀じゃ効率が悪すぎる」

「決めつけがすぎるよ、平野君」

今まで黙っていた冴子が熱に浮かされたように喋りだす。

「でも日本刀の刃は骨に当てたら欠けますし三、四人も切ったら役立たずに……」

「たとえ剣の道であつても結果とは乗数なのだ。剣士の技量！

刀の出来！ 精神の強固さ！！ この三つが高いレベルにあれば何人斬ろうが刀は戦闘力を失わない！」

「で、でも！ 血脂」

「俺のイチオシはミサイルだな。あれほどご機嫌に人を殺せるものはねえよ」

孝の乱入に話しの腰を折られ二人は黙りこんだ。孝のマクロな意見にコータは何も言えずに銃をギュツと抱え部屋を出ていく。冴子は何処か陶然とした面持ちで孝を視ていた。

「冴子、どうしたんだよ あんなに熱くなるなんてらしくないんじゃないか？」

「……なんでもないよ。剣の事だから少し熱くなってしまった。少し頭を冷やしてくる」

そう言つて冴子もまた部屋を出ていく。

「んじゃ、俺は平野を追うんで後よろしく先生」

「はいはい、行つてらっしゃい」

孝がコータを探しに庭に出ると怒鳴り声が聞こえてくる。孝は迷わずにそこに向かう。あれだけの銃を高校生が持っていればトラブルが起きないほうがおかしい。

「なあ君、こういうご時世だ。それだけの武器を独り占めにしちゃいけない。我々に渡して……」

「ダメです！ これは借り物なんだから。それに……あ、あなたたちより俺の方がうまく使えます」

「チツ、貴様あ。吉岡さんが優しくいつてくださる……」

怒鳴り声の場所には数人の男がコータを囲んでいる。孝は鷹揚に近づいていく。

「あー少しいいか？」

「なんだ貴様は！？ 我々は……」

「黙ってるよ、パラノイア共。いいか、一度しか言わないからよく聞けよ。そのむさい面にケツの穴を増やされなくなったら消えろ」

左脇のシヨルダーホルスターから銃を引き抜き突きつける。この銃、シグザウエルP226は孝が高城邸の武器庫からシヨルダーホルス

ターとヒップホルスター、マガジン四つと共に盗み出してきた物だ。更に奈央用にそこらへんの奴からマカロフとマガジン三つをスリ盗ってきた。

「何を騒いでいる！」

「か、会長……こ、このガキ共が銃をオモチャと勘違いしてやがるんで」

「少年たち、名を聞こう！ 私は高城壮一郎。憂国一心会会長だ」

「ひ ひ 平野コータ藤美学園二年B組出席番号三十二番です
！！」

「小室孝」

コータは泣きながら必死に孝は銃をホルスターにしまいながら簡潔に答える。

「声に覇気があるな平野君！ ここに辿りつくまでにさぞ苦労したことだろう」

「あなた、この子たちは……」

「所属するクラスで知れた」

「まあ」

傍で見ていた百合子を取り成そうと壮一郎に近づくが壮一郎は既に気付いていた。この少年たちが娘の級友であると。

「どうあつても銃は渡さぬつもりか」

「ダメです！ イヤです！ 銃が無くなったら俺はまた元通りになる！ 元通りにされてしまう！ 自分に出来ることがようやく見つかったと思つたのに！！」

鋭い眼光にコータは泣きながら叫ぶ。銃はコータの生命線だ。肉体的にも精神的にも銃はコータを救つた。平野コータの価値は銃と共にあつてこそだと本人は思っている。しかし壮一郎の眼光は怯ましい。

「なあ、おい。人の物は堂々と盗つてはいけませんってママから習わなかつたかオールドマン？」

孝は平野の前に立ち壮一郎の鋭い眼光を一身に受けつつも睨み返す。堂々と盗つてはいけないところが如何にもウェイストランド人らしい言い種である。つまりはバレないように盗めば無罪、これが孝の、いや、キャピタル・ウェイストランドのルールだった。

「コータちゃん！」

「彼の、平野君の勇氣は自分も目にしております高城会長」

「アタシもよ、パパ！！」

騒ぎを聞き付けありすに冴子、沙耶に静香も麗を支えながら出てきた。

「ちんちくりんのどうしようもない軍オタだけど、こいつがいなけ

ればアタシは今頃、連中の仲間よパパ！　こいつがアタシを守ってくれたの！　パパじゃなくてね！！」

沙耶と壮一郎のにらみ合い。それを止めたのは走り寄ってきた憂国一心会の会員だった。壮一郎にボソボソと報告している。

「沙耶、民衆が騒いでいる。お前が説き伏せてこい！」

「なんでアタシがそんな事しなければならないのよ！？」

「我が娘は語らねばわからぬほどの愚か者ではない！」

「沙耶、ママからもお願いするわ。パパや私だと、あの人たち警戒しすぎてしまうもの」

にらみ合いは終わり突然の話に沙耶は反抗するが百合子のお願いに屈した。

「い、一緒に行きますー！」

「俺も行くよ」

「私は……」

「毒島先生のお嬢さんにはしばらく私に付き合ってもらいたい」

「……会長がそう仰るのであれば」

「あたしも……」

「宮本さんはだーめ。今からもう一度お薬を塗るの！」

「ありすは奈央ちゃんの所に行くね」

孝とコータは沙耶と一緒に説得に行き、冴子は壮一郎に呼ばれ、麗は静香に掴まり、ありすは孝の部屋で寝てるだろう奈央の所へそれぞれが動きだした。

高城邸の極近くに見覚えのあるマイクロバスが止まっていた。その中では藤美学園の制服を着た学生による淫媚な宴が行われている。その中で参加していないスーツの男はそれを冷めた目で見て嘲笑していた。

「ハア……まさに恐怖こそ最高の媚薬ですね。さて、皆さん、注目！ 注目！ 自由時間は終わりです！」

紫藤は手を鳴らし全員の視線を集め演説を始める。沙耶に紫藤教と呼ばれたそれに生徒たちはドブプリ嵌まっていた。

「勇敢にも一人で偵察に出かけた皆さんのお友達。黒上君から連絡

がありました。この先に避難者を迎え入れてくれる大きなグループがあるそうです！」

紫藤の言葉に沸き立つ生徒たち。それを紫藤はなおも冷めた目で見つめる。

「しかし私は皆さんを導くべき教師としての悩みがあります！」

ざわつく生徒を余所に演説と言う名の洗脳は続く。

「学校にいた時とは反対に今の私は皆さんの自由恋愛を奨励します。それはなぜでしょうか？」

身振り手振りで間を空けて視線を集める。バスの生徒は瞳孔が開きどこか焦点が合っていない瞳をした者や性に溺れ恍惚としている者ばかりだ。

「皆さんにはそうして良い資格があるからです！ 皆さんのような素晴らしい資質を備えた人々の教師であること……それは私の誇りです！ ですが……外をご覧なさい。この惨状を！」

ビシッと指差すそこにはバスの周りを徘徊する無数の 奴ら と化した人々がいた。

「死してなお他者を傷つけようとする者たちに満ちたこの世界を！そして……まだ生きている者たちの多くは自分だけが助かればよいと考えているのです！ なんと恐るべき世界の現実！」

紫藤は表情は真面目に演説しているが肚の裡はどこまでも馬鹿な生徒たちを嘲笑っていた。

毒島、鞠川と優秀な駒を逃しましたが、それを補って余りあるモノを手に入れました。代償に小うるさい男子……たしか卓造とか呼ばれたのとその恋人の女子は死にましたが、まあ仕方のない犠牲です。……我々以外の誰もがそうした世界の住人なのです！　いいえ、以前から世界はそういう場所でした。だからこそ……穢れた世界は……その罪ゆえに滅ぼうとしているのです！」

紫藤の演説は頭の沸いた生徒の琴線に触れたのか一部の生徒が感極まり泣き始めた。

「しかし、皆さんは違います！　未だ若いあなた方は穢れとは無縁です！　あなた方こそが新世界を担う天使たちなのです！」

一時は若さ故に性に溺れたが正気を取り戻し紫藤の演説に不信感を抱いた学生がいた。

「どうしました、山田君？」

「変です。先生の言ってること変ですよ。俺は新しい世界なんて興味ないです。今は家族の無事を確かめて安全な場所に避難した方がいいですよ！」

「はあ……困りましたね。あなたをどう扱っていいのか、私には分かりません……皆さん、どうしたらいいと思いますか？」

紫藤が他の学生に尋ねるが全員、山田と呼ばれた彼を狂気をもって睨んでいた。既に彼らにとって山田は同校生だとか友達ではなくな

っていた。今や異端であり敵でしかなかった。

「……降りればいいじゃない」

「そうだよ！　勝手に降りろよ！」

「」「」「降りろ！　降りろ！　降りろ！」」「」

全ての生徒の降りるコールに山田はようやく自分の身が危ないことに気付いたが既に遅かった。

「せ、先生。お願いします！　せめて家の近くまで乗せて言ってください！」

「といわれても、皆さんが決めた事ですからね。どうしたらよいでしょうか？」

紫藤は心底困ったような顔をして遠回しに死刑のボタンを押す。そして執行人が動きだす。
頷き合った不良の学生たちが山田の肩を掴みドアまで引きずっていく。

「ひっ！　な、なにを……」

「紫藤先生！　ドアを開けてくれよ！」

紫藤はカギを解除し不良はバスのドアを開け山田を思いきり蹴り出す。

「ぐあっ！　いてえっ……くそ……あ……待って、たすけ」

バスは走り出す。窓には必死に助けを求める山田を見下し嘲笑する学生たちが写っていたがそこに天使などは決していなかった。そしてバスは走り去る。残されたのは僅かな悲鳴と幾重にも奏でられる咀嚼音のみだった。

高城邸の庭園は一般の避難民の集団で喧々囂々としている。その中心には沙耶と中年の男性と女性がいた。孝はそれをニヤニヤと眺めコータは心配そうに見つめている。

「何度言ったら分かるのよ！ 殺人病なんてまるっきりの戯言！
奴ら について科学的説明がつかない事を認められなかった
政府が、混乱を拡大させないために広めたウソに決まってるじゃない！」

「じゃあ、本当に死体が動き回ってるというのか？ バカバカしい！
あれは新種の伝染病みたいなものに違いない！」

まさに現実逃避の発言に沙耶もため息を吐く。彼らはただ認めたくないのだ。自分たちの今までが崩れ去った事を。

「 奴ら が人間とは別のものだって事は、アタシのパ……高城会長が見せたハズよ？ アタシだって学校で……あなたたちだって街でイヤになるほど目にしてきたでしょ！？ だいたい、死んで

も動き続けるものに納得のいく説明がつくはずないじゃない！」

「そうはいっても実際に起きている現象だから、必ず納得の行く理由が存在しているはずだ」

「そうよ！ 理由もなしに起きる事なんてないわ！」

余りの聞き分けの悪さに遂に沙耶がキレ、語気も荒く畳みかけるように論破する。

「それならそれでいいけど！ 理由を確かめるのは素人じゃ無理よ？ 専門家が落ち着いて研究できる環境でたっぷり時間をかけないとダメ！ 悪いけどアタシたちにそれは不可能よ。それともあなたは違うの？」

「そ、それは……」

「できないでしょ？ なら 奴ら に喰われず生き続ける！ それ以上に重要な事はないわ！ どうしたらいいかはパパが教えてくれたでしょ？」

上手くいきかけた説得に安堵の雰囲気の流れ沙耶は失言してしまった。それを聞き付けた中年の女性は鬼の首をとったような表情で捲し立てる。

「……そうなのね。結局それが言いたいのね！？ 高校生のクセに銃なんか振り回している連中と一緒にいると思っただら……！」

理解不能の切り返しにポカンとする沙耶とコータ。孝は愉しそうにようやく出番が来たとばかりの笑顔を浮かべ嗤っている。中年の女

性は民衆へと振り返り演説を始めながら沙耶を指差す。

「結局そういう事なのよ！ やっぱ右翼の ヤクザの娘なんだわ！ 脅迫と暴力！ 世界がこんなになって困ってる人が無数にいるというのに……皆さん聴いてください！ この子は殺人を肯定する男の娘で、私たちにも殺人者になれと言っています！」

これ以上の説得は無意味と観た孝は沙耶の前に出る。そして懷からシグザウエルを取り出し蒼天に向けて一発放った。民衆は突然の発砲に呆気にとられ孝に注目する。

「平和主義の皆様方、俺は黙らなきゃ撃つだなんて陳腐な事は言わない。もう喋りたくありませんと言っただけで撃つ。まずは両膝、それから手の指を一本ずつ……ついでに耳もだ」

恫喝と呼ぶには冷えすぎた孝の声音は一瞬で民衆を黙らせた。圧倒的な格の差。肉食獣と草食獣の如き違い。事実、孝にとって彼らは路傍の石以下の存在なのだ。撃つ必要があるなら表情も変えずに撃つだろう。

「さて、俺も争い事は嫌いです。だから単刀直入に言わせてもらいます。黙って散れ。十秒待ってやる」

どこまでも冷えた声はすぐさま民衆を動かしあつという間に散っていった。

「あのね、小室。それは説得って言わないから、それは脅迫って言うのよ！」

「脅迫？ 馬鹿言えよ。みんな大好き平和的解決だ」

苦笑いしていたコータは散って行った人々のいた所を見つめてポツリと言った。

「でも……僕ちよつとわかりますよ。あの連中の気分」

「アタシにケンカ売る気なのでぶちん！」

「そ、そういう事じゃなくて……」

コータの瞳はどこか遠くを覗いているように中空を彷徨つ。

「人間って見たくないものは見ないでいようとするんです。誰も自分を否定されたくない。だからほとんどの人は何が起こっていると分かっていても……なんにもしないんです」

「でも、何かが変わってしまった事を認めざるをえないじゃない、今は」

「え、ええ。でも、そういう時一番最初に出てくる反応は……現状を元に戻そうとします。どんなことでも、時にはうまくいかない事が最初から分かっているさえ。なぜかっついていえば……」

「変化を認めなければ自分の過ちや愚かさを認めないで済むから」

「そ、そうです。僕は、あの学校とかで色々あった時に考えてそれが分かりました」

コータは自分の一番痛い部分を抉り返す。前へ進む為に過去を思い浮かべ自然と視線が下がっていく。それを沙耶は覗き込むように見

上げて言った。

「ふーん、ちょっと見直したわ。アンタのこと」

至近距離に近づく顔と誉められたのが科学反応を起こしコータの顔を真っ赤に染め上げる。そして沙耶は黙りこくる孝に視線を向ける。

「それで、我らがリーダーはどうしたの？ 黙りこんで」

「いや……なんでもない。……リーダー？」

「そう。アンタがリーダーよ。というよりアンタしか成り得ない」

面倒臭いと呆れの入り混じる表情を浮かべながら孝は空を見上げた。空はどこでもいつしよだたと現実逃避しながらどこから届く静香の治療による麗の悲鳴を聴いていた。

離れの大きな和室に軍服と和服という時代錯誤の男女が座っていた。男の後ろには敬天愛人と書かれた掛軸が架かってその下には刀台が置いてある。

男 壮一郎が和服の女に刀を差し出す。

「これをどうみる」

刀に穢れをつけないように手を和服の裾で覆い受け取る女　冴子
はしづしづと刀を眺める。

「毒島先生が御息女はかの千葉佐那子に勝るとも劣らぬ剣士と側聞する。ならば……いや、たとえ女であろうと、剣の道に照らし恥ずべき所が無い者ならば、直に触れようと刀の穢れにはならん！」

迷いがあつた。だが少しの逡巡の後に刀に触れて静かに抜き目の前に持つてくる。

「まことに珍しい」

「見えたか？」

「反り浅く、刃紋の浮かぬ鋒両刃の小烏造り」

チンと鞘に刀を収め

「小銃兼正……村田刀と見ましたが」

「むうつ、さすが！　見立てどおり、明治半ばあの村田銃で知られる村田少将が東京砲兵工廠で造ったうちの一本よ。豚の頭骨を一刀両断して刀に傷一つつかなかったと伝えられる」

刀を返そうと裾を抑え

「眼福でありました。して」

「もはやそれは貴女のものだ」

ピタリと止まった。

「……無礼を承知で申し上げますが、正当な理由がなければいただけません」

「毒島先生の御指南を受けた事がある。その御礼……ということでは納得出来ないか」

「ならば父にお渡しいただくべきかと」

冴子の毅然とした返しに壮一郎は膝を叩き腹の底から呵呵大笑した。笑いながらその胸の裡を明かす。

「むう、さすがは毒島家御息女！ 本音を告げるよりないか」

「申し訳ございません」

「想像はついていよう。不出来な我が娘の事だ」

「確かに私が命を救ったことありますが、彼女のおかげで逃れた苦難もあります。そこまでして護りたいのであれば常に傍らに置かれてしまえばよいではありませんか。高城家ご令嬢はご両親を心より敬い、愛しているのですから」

「親子は似るといふ事かな」

「ならば尚更、或いは自分ではなく小室君に……彼こそが我々の」

冴子が全て言い切る前に壮一郎が割って入る。

「小室……か。彼の身の上は百合子より聞いた。正直な所恐ろしくて仕方がないのだ。彼の瞳は暗く冷たい炎のように静かにされど激しく燃えていた。あの瞳を私は知っているのだ。絶望を見つめつつ希望を探る瞳　かのチエ・ゲバラと同じ部類の男だ」

「……彼は尋常ならざる世界で生きた男子です。そして今は世界が彼の世界と同じか、それ以上の荒涼の世界へと変貌を遂げてます。ここからは小娘の戯言と思いお聴き流してください」

冴子は頭を下げて肅々と話します。

「私は彼が何事かを為すと思っております。善かれ悪かれ必ず彼に試練があるかと。」

……私はそんな彼を支える　いえ、支えたい。それだけです」

孝は宛てがわれた部屋で P i p B o y と向き合っていた。修理しようにも構造がよく分からない為に分解も出来ない。仕方なくベツトに飛び込み伸びる。

しかし謎が積もるばかりだ。フェラルグールの亜種のような 奴らに頭に響いた謎の声。更には P i p B o y の不調まで起こった。それに謎の声の主が何処かで待っているらしい。そいつは確実になにかを知っている。俺の事を知っていた様だしキャピタル・ウェイ

ストランドの住人なんだろうか？

まあ、いい。とりあえず母さんを助けて安全な場所へ避難させてからの話した。

孝が考えを巡らしていると控えめなノックの音と共に麗が現れる。

「孝？　今いいかな？」

「ああ、だけど身体大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

孝はベットに腰かける麗の方向に寝返りをうち訊ねる。

「どうした。何か用か？」

「うん……前の……孝の世界の話しが聞きたいの」

「俺の世界……ね。いいさ、何が聞きたい？」

麗の横に座り質問に時にオブライトに包んで、時に率直に答える。すると次が最後の質問と言われる。

「その……ね？　恋人はいたの？」

「……いなかった。愛とか恋とかを求めるには時代と人に余裕がなかった。代わりに求められたのは誰にも屈する事のない人殺しだ」

「……ごめんなさ　」

「でも、麗みたいな美人がいなかったからな。だから謝るなよ。俺は哀しげなごめんなさいより笑顔のありがとうの方が好きなんだ」

「うん、ありがとう」

麗の微笑みにホッと息を吐こうと

「私ね、絶対諦めないから……たとえば、あなたが他の女を好きになったとしても諦めないから！」

麗は言うやいなや顔を真っ赤に染め逃げるように部屋を出ていく。残された孝に出来たのはむせて激しく咳き込む事だけだった。

く女の戦い 宣戦布告篇く

麗は孝の部屋を出て廊下を早足で進む。頭の中では物凄い混乱をおこしていた。もしかして私……告白した！？ どうしよう、どうしよう！？ 舞い上がって言うっちゃったよく

きやくと頭を抱える麗。そんな中、向こうより冴子が歩いてくる。

「おや、宮本も小室君の所へ行ってたのか？」

「ええ、そうよ。た・か・しの所に居たの」

冴子の発言の小室君への当て付けのように孝の部分を強調し言う麗。勿論、冴子も気付きムツとする。

この女は自分の方が小室君と仲が良いと、言いたいのだろう。だが

「ふふっ宮本？　小室君に良い女と口説かれてしまったのだが…
…どうしたものかな？」

「っ！　うふふ。あら毒島先輩？　私なんかキスまでしちゃったんですよ？」

交差した視線が弾けてギリギリと空間が悲鳴をあげる。昼間の筈なのに二人の周りには夜の帳が落ちたかのように暗い。というより黒い。

「み、宮本。面白い冗談だな。君は芸人になった方がいい」

「ぶ、毒島先輩こそ冗談がお上手で。是非ともコメディアンを目指すべきかと」

二人共、笑顔で乾いた笑い声を出すが目は欠片も笑ってない。本来笑顔は威嚇の役割を担うらしいが今の二人の間に割って入ったら心臓の弱い人なら死ぬだろう。威嚇ではなく立派な凶器と化している。

「それじゃあ、失礼しますね。抱き締めてキスしてもらえない毒島先輩」

表面上はにこやかな麗が去るが、冴子は動かない。その表情は前髪の影に隠れて伺う事はできなかった。

8（前書き）

書いてる時は楽しいのに推敲すると恥ずかしくなる。駄作者はそんな病にかかりました。とりあえず上げます。ですが、書き直しますかもです。

誤字脱字、感想、ダメ出し、大歓迎です。

拙い作品ですが読んでいただけたら幸いです。

毒島冴子は異常者だ。

その事を彼女は自覚している。自覚しているからこそ他人にバレないように社会に適合するために壁を創った。

他人と自分を隔てる無色透明のレンズのような壁は人々の視線のピントをずらすかの如く大和撫子の冴子しか写しださない。

誰もが冴子の虚像しか見ない。彼女は孤独だった。どれだけ周りに人がいようと彼女は一人だった。

そして世界が終わった日。彼女は出会ってしまった。自分以上の異常者に。もっとも自分に近い者に。

歓喜に震える彼女は彼に近づいていった。近づけば近づくほど彼の全てに惹き付けられていく。遂に彼女は自分の全てを彼に打ち明ける。筈だった。だが彼の部屋から出てきただろう女、宮本麗により目論見は打ち碎かれた。

彼はあの女を、宮本麗を選んだのだろうか？

それを考えるだけで冴子の中に煉獄の焰が吹き上がる。熔岩のような嫉妬がドロドロと心を覆う。

その時ふと、天啓が舞い降りた。

奪えばいい。彼が宮本を選んだのなら私が彼を奪い取る。暴力を使わない闘い。私は私の魅力で彼を得る。次に臍を噛むのはお前だ宮本！

「いいか、奈央。こいつはコンパクトだがハイパワーだ。イワンのライフル狂いの連中が作った拳銃にしては上等だ」

孝は高城邸の庭園で奈央にマカロフPMMの取り扱いを説明していた。ガク引きにならない構えを教え込み、工具を使わない分解フィールドストリッピングに残弾数を数えて弾切れの前にリロードしマガジンを棄てずに再利用する　タクティカルリロードを叩き込む。

隣では麗がコータにM1A1の構え方を習いコータは教えながらもAR10のスコープを合わせている。

「本当に三人だけでいくワケ？」

「俺達の親だし、奈央はついてくるみたいだしな。明日にでも出発するよ」

沙耶の問いに孝は答える。

もう此処に戻ってくることはない。きつと母さんは教え子達を見捨てないはずだと孝はそう考えていた。小学生が増えたらいくら孝でも行動が制限される。高城邸の人々はあと数日で発つらしいのでどうも間に合いそうもない。

「ならば、私も連れて行ってほしいな、小室君」

「いや、別にかまわないが」

「やった、やった　おもいだしたあ！！」

冴子との会話を妨げたのは静香のどことなく気の抜ける声だった。ありすを抱きしめ満面の笑顔で友達の携帯電話の番号を思い出した

と喜んでいる。

「友達って言うのと銃やハンヴィーの？」

「そう！ 県警の特殊部隊…… S A Tの隊員だからきつと生き残ってるわ。もし一緒になれたら……凄いでしょ！！ それより電話、電話！」

「どうぞ」

孝は懷から携帯を取り出して渡す。勿論スリ盗ったものだ。孝にとって高城邸は物資供給所ではない。

「あれ？ 小室君、携帯持ってたの？」

「いえ、ヒロイマシタ」

つと視線を反らした先では麗が血相を変えて駆け出していた。その殺意の先には見覚えのあるマイクロバスがあった。

「まさかこのような時に紫藤代議士の御子息をお助けする事になるとは！ まあ、この有り様では選挙どころでは有りませんが」

「かまいません。今の私は一教師にすぎませんから」

「たいしたものですな！　学校から生き残った生徒さんたちを連れて脱出されたとは！！」

「当然ですよ。教師の義務です……」

「さすが、お父上の薫陶の賜物ですな！」

そんなはずはなかった。紫藤浩一が父から学んだのは社会の負の部分のみだ。父が父なら子も子ということだろう。紫藤という家に復讐心を燃やし破滅に酔っていた。いつかの為に父に従い宮本麗を留年させた事にも罪悪感などは欠片もない。

「こちらは大変なことはわかっています。ですからせめて……生徒たちだけでも助けていただけないでしょうか？　私は自分だけでも」

「随分とご立派じゃない。紫藤せ・ん・せ・い？」

紫藤の頬に突き付けられた銃剣のような冷徹な声。その冷たさは紫藤の余裕を剥ぎ取り恐怖に陥れた。破滅願望と自殺願望はえてして一致しない場合がある。紫藤の破滅願望は多分にナルシズムを含んでいた。

「み、宮本さん、ご無事でなにより……」

「私がなんで槍術が強いかわってる？　銃剣術も教わってるからよ！　県警の大会じゃ負け知らずのお父さんに！！　そのお父さんをあなたは苦しめた。どんなことにも動じない人が泣いて謝ったわ。自分のせいで私を留年させたって！！　そして私にはわか

つてる！ 成績を操作できるのはあなただけだって！ でも我慢してた！ お父さんの捜査がうまくいけばあんたも紫藤議員も逮捕できると聞かされてたから！ でも……もう……」

銃剣の刃先が紫藤の頬に当たり汗のように血が垂れる。

「さ、殺人を犯すつもりですか？ 警察官の娘でありながら犯罪者になるつもりですか？」

あまりにも自分の事を棚上げした紫藤の言い様は麗の逆鱗に触れた。

「あんたになんか……言われたくないわよ！！」

「ならば殺すがいい！」

騒ぎを聞き付けやって来た壮一郎の言葉が麗の怒りに冷や水をかけ、紫藤は恐怖により自暴自棄になっていた。

「いいでしょう……殺しなさい！ 私を殺して命ある限りその事実に苦しみ続けるがいい！ それこそが教師である私が生徒のあなたに与えられる最高の教育です！！」

麗の一挙一動に息を飲み緊迫に包まれる。皆が見つめるなか麗は自問自答していた。

こんなやつを殺して復讐して私は満足なのだろうか。留年の事は腹が立つしお父さんを苦しめたのは許せない。でも……こんなやつを殺してもきつとお父さんは喜ばない。

憎悪も憤怒も押し込めて麗は銃を下げる。

「……それが君の判断なのだな？」

「殺す価値もありませんから」

その言動が紫藤のプライドを打ち砕いた。屈辱に震える紫藤は直情的にスーツの内ポケットから銃を取り出して麗に向ける。紫藤の切札、生徒を犠牲にして手に入れた牙。

エアウェイトが裂音と共に鉛を吐き出す。

紫藤は確信した。

殺したと、生意気な小娘を殺してやった、と。

しかし思惑とは裏腹に紫藤が懷に手を入れた時に孝は駆け出していた。孝が麗に飛びつき弾は間一髪、孝の頬を掠めただけだった。直ぐ様、孝はホルスターからシグザウエルを抜き紫藤に向ける。瞬間、紫藤の沸騰していた思考が一気に氷点下まで下がった。

「あなたは 私を殺すのですか？」

「さあな。お前がそうやってブルって縮み上がってるままなら確実にそうなるが」

擦れた声で問うた紫藤に、孝はシグザウエルを手慰みに指先でスピンさせながら、他人事のように素っ気なく語る。

「ひよつとしたら死ぬのは俺かもしれないぜ。お前だって銃を持っている。俺は別段、不死身な訳じゃない。お前の三八口径が背骨に沿った何処かに当たれば、俺だって御陀仏だ。その時は、生きて立ってるのはお前だろうよ」

「……」

確かに紫藤は銃を持っている。しかし怒りが冷めた今、銃を使うと

いう発想自体が紫藤からは欠落していた。そしてそれを孝は見抜いていた。

「ハンデをやるよ。チキン野郎にお似合いのな」

猛禽類を思わせる笑みでそう嘯いて、孝は手にしていた拳銃を紫藤に向けるのではなく、ホルスターへ戻してしまった。が、デコッキングレバー、いわゆる安全装置には触れもせず、撃鉄は起こしたままで。

「さあ、先に動けよ。いつでもいいぜ」

その意図を理解して紫藤は戦慄に身を凍らせる。周りの人間も異様な雰囲気にも動ぎ一つ出来ない。

「な、何故ですか！？ そんなことになんの意味が……何故あなたは死にかけてまで私を殺すのですか！？」

「おい、おい。何を言ってるんだよ。折角の決闘が台無しになるだろ」

紫藤の狂乱を涼しい顔で笑い飛ばして、孝は双眸に深い闇を覗かせる。深淵のような瞳は紫藤を捉えてはなさない。

「大体、意味ってなんだ？　今ここで銃をぶっぱなすことの他に、お前の人生に意味なんてあるのか？　朝起きて夜寝て、飯を喰って糞して、その憂さ晴らしに酒飲んでファックしてそれで？　そのどこかに意味なんていうご大層な物が挟まっているとも思うか？　おめでたいな、クソツタレ。命に意味があったら、それは運良く拾ったときぐらいだ」

紫藤はただ呆然と目の前で笑う死神を眺めた。

「ガンスリンガーは撃たれて当然なクソだ。ガンスリンガーの条件はたった一つ　人に銃をぶっぱなすことだ。そして寄しくも俺達はガンスリンガーだ。安い命の重みを量るなら、今このときしか他にない。つまりだ、テメエのその命に意味をくれてやるよ。どんなクスリよりも最高にハイになれるぜ。生と死のシーソーゲームってやつは！」

なんだこいつは？　紫藤は自分の出会った事のない人種に戸惑い恐怖し叫びたかった。学校にこんなやつがいたのかと、戯れで死のうとするようなやつが。

紫藤は周りを見渡した。誰もが孝の雰囲気魅入られていた。

「……い、嫌だ、嫌だ、私は……」

孤立無援の状況に遂に紫藤は涙声になった。

「……私は……こんな場所で死ぬなんて……そんなの何も残らない！　無駄じゃないですかッ」

「ああ、無駄だろうよ」

孝は頷いて、虚ろな声で嘯く。キャピタル・ウェイストランドの全ての住人の声を代弁するかのように。

「それが嫌なら吼えてみる。その銃で、この虚ろな世界に向けて今ここにいるぞと吼えてみせる。それが俺達ガンスリンガーの習いだ。誰かの命を撃ち抜いて、自分の命を拾うのさ。分かるだろう？」

俺達のこの人生も、その瞬間にだけは意味がある」

「ッ」

紫藤は手の中にある鋼の塊を意識した。それは軽く、だが重い。

「お前は性根こそ腐ってるが能力は低くない。なにせ今の今まで生き抜いている。それはこの終わった世界で一番価値のあることだ。教師だとか議員の息子だとかよりよっぽど大事な事だ」

孝の右手はホルスターの銃把へと跳ぶべき必殺の瞬間を見計らい、構える。そして彼はもう一方の左手で紫藤を誘い、差し招く。

「さあ、来いよベイビー。本当の人生の意義ってヤツを教えてやる。ようこそキャピタル・ウェイストランドへ。歓迎するぜ」

狂乱に陥っていた紫藤の思考が、このとき、ようやく焦点と距離感を取り戻した。

復讐心 たとえ命を投げ出しても破滅させてやると誓った原初の想い。なぜ忘れていたのだろうか。唯一の拠り所、たった一つ、それだけだったのに。

そうだ、自分は何を喪ったわけでもない。

コッコツと貯めた罪の証拠も失い、裁くべき父の所在すらわからない。だが 銃を握る掌が、銃爪を引く指が、ここにある。法が裁かないのなら自分で裁く。そのために思い知らせよう。証明しよう。この虚ろな世界に向けて。こんなところで死んでやるかと、雄叫びを上げて知らしめるのだ。

「……」

紫藤は眼前に立ちはだかる敵を凝視した。ただ生きる為に、ただ勝

つために。

進めるのはただ独り。一方はここで地に伏す。

紫藤の総身の全てが、この対決の為に動員されていた。

背筋を駆け巡る戦慄の感触。鼓動が高鳴る。頭の奥が痺れる。

紫藤は生きていた。今までのどんな時よりも鮮烈に紫藤は生きていた。

身体が、魂が、運命のときを告げる。

今だ、と。

迷いも、怯えもなく、下げていた銃を振り上げる。

高城邸に、銃声が轟き渡る。

何か熱いものが身体を貫く感覚に自然と仰向けに倒れながら、紫藤は笑った。

なんて……美しい空なんだ。

いつからか、世界は汚いと信じきった男は空をも見上げなくなった。だが徐々に目にした朱に染まった空は透きとおるように輝き、紫藤を祝福しているかのようにだった。

いい闘いだった。ガッツ有るじゃねえか

闇に沈んでいく意識の中で、誰かがそう呼びかけてくるのを聞いた。誰かとも思えない。よくわからない。ともあれ、子供の頃に出会ったかった。そうしたらきつと

その決闘を見ていた全員が幻視した。乾ききった荒野に至る所に残る文明の跡が織りなす世界　キャピタル・ウェイストランドを。そして見入った、眩く輝く男達の闘いに。

壮一郎は撃たれた紫藤の顔を見て驚いた。険の抜けた穏やかな顔をして眠っているかのように息絶えているのだ。この顔が出来る死に方など数少ない。後始末を部下に任せ紫藤と一緒に来た学生へと向き合う。

「お前達は去れ！　既にくだらぬ教えに染まっている！　普段ならば鍛え直してやっても良いが……いまの我々にその暇はない！　乗ってきたバスで追い払え！」

憂国一心会の会員が学生をバスに詰め込んでいる中、孝は虚空を見つめていた。そこに百合子が近づいてくる。哀しむような憐れむような表情で悲しげに孝に話かける。

「小室君。先程の話しが貴方の真理なの？」

「違う。キャピタル・ウェイストランドの真理だ」

孝はこれがガンスリンガーの終りだと奈央に教えたかった。自分の後を追いかけてくる者だからこそ知って欲しかった。力を持つ事の弊害を、そして覚悟を。

「父様！」

理解した奈央はたまらず孝にすがりついた。ホルスターに収まった銃が重く感じて鋼の冷たさが恐ろしくなった。

今まで自分はなにも知らずに銃を持っていた。巧く使えば父様に追いつけるかもしれないなんて思ってしまった。

昂っていた心は冷えて無性に寒い。

震えている奈央に孝は膝立ちになり目を合わせコツンと額と額をぶつける。

まだVaultで暮らしていた頃に腐つてたときに、悲しいときに、悔しいときに、アマタがしてくれた不思議と元気になる魔法。ただ額と額を合わせてるだけなのに心を燃え上がらせるおまじない。

奈央はいつも背中ばかり見ていた孝を久しぶりに正面から見たような気がした。そして実感した。

背中に追いつきたいんじゃない、一緒に居たいだけなのだ、と。

本質的にもっとも孝に近いのは冴子だがもっとも孝に影響を受けているのは奈央だ。

キャピタル・ウェイストランドの薫陶を受けた奈央は今、変化しつつある。Vaultを飛び出し様々な苦難に立ち向かった時の彼のように。

「あれえ？ ケータイ動かない」

遠く空が稲光りした。雷よりも白く明るく照らすそれは孝が馴染み深いものだ。

「核……爆発？」

「ッ 宮本！ 銃のドットサイトを覗いてみて」

「えっ、なんで？」

「いいから覗いて。アンタのやつＩＣ使ってるはずだから」

麗が覗いても赤いドットが見えない。

「あれ？ 見えない」

「やっぱり……パパ！ 計画を立て直さないとダメ。これはきつと」

「入ってきたあああ！！ 来るなあ！ 来るなああ！！」

見張りをしていた男だろう。彼が門前まで逃げてきていた。しかし不幸にも慌てふためいた男は門前で転んでしまった。迫ってきていた奴らが逃がすこともなく喰らいつく。

ぎゃああああああ

腕を、脚を、腹を、背を 奴ら に食いつかれ断末魔をあげる男を見て壮一郎は即座に決意する。

「門を閉じよ！ 急げ！ 警備班集合！ 死人どもを中に入れるな！」

「しかし、会長！ それでは外にいる者たちを見捨てることに！」

「今閉じねば全てを失う！！ やれ！！」

彼らが門を閉めようと四苦八苦してる時にようやく孝は呆然自失から立ち直る。既にリーダーの立ち位置にいた孝が動かないため動きようがなかった。

「H A N E……」

「そうよ！ 高々度核爆発ともいうわ。大気圏上層で核弾頭を爆発させるとガンマ線が大気分子から電子を弾きだすコンプトン効果が始まる。飛ばされた電子は地球の磁場に捕まって広範囲へ放射される電磁パルスを生じさせる。その効果は電子装置にとっては致命的！ アンテナになりうるものから伝わった電磁パルスで集積回路が灼けてしまう！」

百合子から渡されたルガーP08とストック、ドラムマガジンをホルスターに収めた沙耶により門や車、コンピューターが動かない原因が発覚するが対処法はない。

「沙耶ちゃん。貴方は小室君たちと一緒に行きなさい」

「ママ！？ 私は」

「沙耶ちゃん……いきなさい」

沙耶は何も言えなかった。百合子のたったの五文字の言葉に母の愛情全てが籠められていた。

「お話は終わったか？ 俺と冴子以外はハンヴィーに乗って脱出だ」

「だから車は……！ そうね、対EMP処置されてるかも。でも、

アンタたちは……」

「俺も冴子も武器は家の中だ。それに冴子は着替えなきゃいけないしな」

「なら一緒にいくわ!」

未だに和服の冴子とシグザウエルしか持っていない孝は一旦、家に入らねばならない。だが必要そうな物は大体ハンヴィーに積んである。さらに運が良いのか、悪いのか麗もコートもフル装備だ。

「いや、先に行け。俺と冴子ならよほどの事がない限り大丈夫だ。合流は東署だ。三日、いや、二日で着く」

「孝!」

「大丈夫さ、麗。信じろよ」

見詰め合う二人は今に抱きしめ合ってキスしそうな甘い雰囲気が出た。

「ごほん! それでは行動を開始しよう。いいかな?」

「あ、ああ。勿論さ」

そんな雰囲気を作り捨てたのは勿論冴子だ。嫉妬に燃える瞳を押し隠し、孝の腕を掴み引っ張る。しかし孝は意気消沈してる静香の前で止まる。

「先生、先生には俺たちの親捜しに付き合ってもらおう。かわりに先

生の友達を捜すの手伝うよ」

「うう……小室君！」

感極まった静香が抱きつく。その広大な母性に抱きしめられた孝は至福を味わっていた。もし、今周りに激しい嫉妬の籠った視線や呆れたような視線が無ければ押し倒して自分のものにしていただろう。だが段々と冴子の孝の腕を握る力が増していくため仕方なく孝は離れる。

「それじゃ、平野。頼んだ」

「うん、そっちも気をつけてね」

コータは孝が 奴ら にやられるとは欠片も思っていない。だが痴情の縛りで刺されるかもしれないと心配していた。

宮本さんに毒島先輩に静香先生も危ないかな。小室は本当に気をつけないと刺されるよ。羨ましいけどボクは

前を駆ける沙耶を見てコータは嘆息しながらハンヴィーへ駆けだした。

冴子は着替えながら狂喜していた。窓の外は阿鼻叫喚の地獄絵図と化しているのに、だ。門は破られ庭は火に包まれた。既に仲間たちもハンヴィーに乗って脱出しただろう。

絶体絶命、この言葉がふさわしい状況。

ストッキングに脚を通してながら笑う。不謹慎だと思いが楽しくて仕方ない。彼と一緒にいるのだ。例えば地獄だろうが楽しくない筈がない。プロテクターを付けタクティカルグローブを着けて村田刀を佩く。

鏡に写る冴子は危険な色気に満ちていた。スリットの入ったスカートの制服の上半身が対照的だがそれも冴子の魅力を損なう事はない。冴子は鏡を一瞥し部屋を出る。

廊下には孝が待っていた。背中にバックパックとイサカM37を背負い腰に刀を帯びている。

「小室君は刀を使えるのか？」

「ああ。サムライに教えてもらった事がある。人っぽいのも相当ぶった斬った」

「人っぽい？」

「まあ、それはどうでもいいさ。外のパーティーも佳境だし一曲踊りませんか？ お嬢さん」

孝は舞踏会のお誘いのように気障ったらしく手を差しのべる。

「ふふっ 君となら喜んで」

差しのべられた手を取り二人は煉獄へ駆け出す。その足取りはどこまでも軽かった。

高城壮一郎は決断を迫られていた。生き残りを後方に集め体勢を立て直しはしたが彼の部下は数人しか残っておらず一般人の生き残りも二十人程しかない。

「総帥！ 隣家はまだ襲われておりません！ 門の補強も可能です」

「……これより敵中を突破し隣家に向かう！ 男で戦う気概のある者は集まれ！ 女子供で生き残りたいものはその後ろに固まれ！」

男が五人、前に出てきたのを確認し壮一郎は指示をだす。

「ダイナマイトを投げよ！」

爆発で数十体の 奴らが吹き飛ぶ。それでも数えきれない程残っている。

「へい、オールドマン。路は拓いてやるぜ。なに、気にすんなよ。飯の礼だ」

「……小室君か。いいだろう！ 先陣は任せた！」

「小室君、毒島さん……二人とも死んではダメよ。未来は貴方たち若人が創るのだから」

冴子は静かに頷き、孝は不敵に笑い答えた。

「I M a m」

そして孝は刀を抜き 奴ら の群れの中へ躍り込んだ。傍らには冴子を従え路を斬り拓く。

後ろから見ていた壮一郎や百合子でさえ見惚れた。まるで舞踏のようには鮮やかに敵地を進む彼らの姿に。荒々しいボレロと優美なワルツの如き剣撃が 奴ら を刻む。

二人は笑っていた。いや、笑いとすら呼べない獣の貌で剣戟が吼える。孝の隙を冴子が冴子の隙を孝がカバーする。薄氷の上を渡るような危険な戦いを躊躇なく、躊躇いなく、容赦なく駆け抜ける。

「我らも続く！ ゆくぞー！」

ある者は銃で、ある者は刀で、ある者は鈍器で必死に 奴ら を倒す。

力及ばず倒れる者、愛する人の為にその身を犠牲にする者、噛まれた者は一体でも多くの 奴ら を道連れにしようと突っ込んでいく。それでも全員諦めない。薄く細いが確かに路は在るのだから

彼らが隣家にたどり着いた時には生き残りも半分程にまで減っていた。

壮一郎と百合子が孝と冴子を捜すが二人は借りは返したとばかりに未だ 奴ら の少ない方へ駆けていた。

どれほど走っただろうか。暮れなずむ中で孝と冴子は今日は休む事に決めた。そして休むのに適当な場所を考え、ある場所を思いついた。

「冴子、あそこのカラオケで休もう。防音もバッチリだし軽食と水もある」

「カラオケか、分かった。だが急いだほうがいいな。日が暮れてきた」

カラオケへ移動しドアに手をかけるが開かない。鍵が掛かっている開かない。

「小室君、これを」

冴子が指を指した所には営業時間と定休日が書かれた紙が貼っていた。

「まあ、これで中は安全だな」

世界が終わった日、この店は定休日だったらしい。孝達はカラオケの裏口へ回る。途中、窓等をチェックし安全か確認し裏口のドアノブを握る。が、開かない。

「開かないみたいだが……どうするのだ？」

「この程度の鍵なら」

バックパックからドライバーとヘアピンを取り出し慎重に鍵穴に差し込んだ。そしてヘアピンを動かし手応えの有ったところでドライバーを回す。

ガチャンと鍵が開きドアが開く。冴子は孝の多才ぶりに苦笑する。

「君は本当に何でも出来るのだな」

「俺は出来る事しか出来ないさ」

二人は一番広い部屋で休む事に決めた。冴子は刀の手入れを孝は探索を始めた。

日も落ちて手元が見えなくなった頃、孝が探索を終えて戻ってきた。手に抱えていた軽食やワインを机の上に置き孝はソファーに腰を降ろす。そしてポケットからジップを取り出し火をつけたまま机に置き、灯りがわりにした。

「小室君、君の刀は駄目だ。腰が伸びてしまった。もう使い物にならないよ」

「そうか、仕方ない。ここに置いてくか」

黙々と軽食を食べる孝を冴子はチラチラと伺う。

「何だよ、食べないのか？」

「……少し私の話を聞いてくれないか？」

「別に構わないがシリアスな話か？」

頷く冴子を見て孝も食べるのを止めて向き合う。

「私は……毒島冴子は」

「暴力が大好きですってか」

ハッと伏せていた顔を上げると不敵に笑う孝と目が合った。

「奴らを斬るときの顔で分かったよ」

「そうだ。私はまともな理由も無く力に酔える。四年前……夜道で男に襲われた。むろん、負けはしなかった。木刀を携えていたからな。男の肩胛骨と大腿骨を叩き割ってやった」

「それで？」

「……楽しかったのだ。明確な敵が得られたことそれは悦楽そのものだった！　木刀を手にした自分が圧倒的な優位に立っていると知ったあとは、怯えたふりをして男の動きを誘い……躊躇う事なく逆襲した！」

うつ向いていた顔を上げた冴子の瞳はその時を思い出したのか愉悦と狂気に染まっていた。

「楽しかった。本当に楽しくてたまらなかった。だが、すぐに気づいたよ。私は人として壊れていると」

「誰の心にも化物が棲んでいるのさ。大体の人間は気付かないがな。大事なのは制御する事だ。もしも　もしもだ、冴子」

強い意思の籠った瞳に冴子は魅入られ嬉しさに頬を緩ませる。この瞳を私に向けている。私だけに。宮本ではなく私に、だ。

「お前の得物が向いちゃマズイ方に向いたら俺がお前を殺してやる。

命の限りこの誓いを破らない。だから大丈夫さ」

冴子は感極まった。

この台詞はまるで、そう、まるで プロポーズだ。

口を押さえ歓喜に震える中で冴子は一抹の不安が過ぎった。

あの女、宮本がいた。きっと彼は宮本にも徒ならぬ感情を抱いているだろう。

そう思うと冴子の嫉妬心が燃え上がる。あの時の屈辱がコールタールのようにドロドロと胸中に広がる。更に独占欲が心をコーティングする。

「……信用出来ないな。誓いというなら 君を私に刻みつけてくれ」

孝はスカートを落とし制服のボタンを外しながら近づいてくる冴子に呆然と見惚れた。引き締まった身体、白磁のような肌、美しい乳房。ジッポの炎の灯りがゆらゆらと冴子を妖しげに彩る。

そして二人の影が重なった時、孝はジッポを消した。

床主国際洋上空港の使われていない廃倉庫。そこには 奴ら はいなかった。が誰がいる。野太い声が響いた。

「オイ、キイタカ。ヨウヤク、ソトニデレルラシイゾ」

「アア、シンセンナニクヲタラフク、クエルナ」

倉庫の天窓から差し込む月明かりが話している二人を映し出す。
灰色の肌に緑の体毛の巨人。ジャンクで作った服を纏い、手には銃
とスレッジハンマーを握っている。この世界にいる筈のない存在が
そこにいた。

閑静な住宅地の外れにあるカラオケの一室に裸で一枚のブランケットに包まれた男女がいた。男は女に腕枕し女は男にピタリとくっついて
いる。そして女は甘えるように身体を擦り付け男の耳元で囁く。

「君の話が聞きたいな」

「ピロートークには向いてないぜ」

「それでも……君の、孝のことを知りたいのだ」

「そうだな……じゃあ、旅に出たばかりの時の話をしよう。題する
ならば」

「英雄が生まれた日」

Vault 101を飛び出した男は宛もなくさまよっていた。父を追う気力も湧かずただ荒野を漂っていた。

男の目には世界がモノクロに見えた。レイダーに襲われた時も命を省みない戦い方で皆殺しにした。

死場所を求めて男は歩き続けるが何時しか限界を迎え荒野で倒れてしまった。

ここで死ぬのかと男は笑い目を閉じた。

ドスンと地面に叩きつけられる感覚で目が覚める。

どうやら台から落ちたらしい。周りを見るとまるで屠殺場だった。生々しいまでの血と臓物の匂いが蔓延した部屋。蝋燭の薄灯りと換気の悪さがここが地下室であると雄弁に語る。台には糸鋸に肉切り包丁が置いてあり切り刻まれた人と思わしき残骸があちこちにある。

「驚いた、あなた、生きてたのか」

声がした方には人が二人、老人と子供が座り込んでいた。

「あなた達は……それにここは？」

「ここはアンデルの町の家の地下。人間の精肉場じゃ。町と言っても住んでいるのは二世帯程じゃがな。わしはハリス、この子はジュニア・スミス」

「精肉場か……あなたにバラされるのか？」

男の問いにハリスは物憂げに答えた。

「わしらはこの町に住んでおった。何代も前からずっとじゃ。じゃがな、この町には経済産業は何もない。狩りも上手くないかない。そんな時に御先祖は禁忌を犯したのじゃ」

「人を喰う……か」

「そうじゃ。そんな町に人が住みたがる訳もなく何時しか近親婚をするようになった。わしも若い頃は人を狩り、喰っていた。妻は姉だったしのう」

ハリスの隣のジュニアがジッと男の方を見ている。その視線は憧れの人に会えたかのように輝いていた。

「お兄さんはVaultの人？」

「ああ、そうだ」

「やっぱり！ ジャンプスーツを着てたしもしかしたらと思ってたんだ！」

ジュニアが懐から取り出したのは一冊の本だった。手垢だらけで汚い文字でVault Dwellerと書かれている。

「西海岸から来た旅の人に教えてもらった話を本にしたんだ。ボクはもう暗唱出来る位読んだからお兄さんにあげる」

「ああ、ありがとう。だが何故こんな場所にいるんだ？」

「ボクは自分が何を食べてるのか知ってしまった。そして父さん達に人を喰うのを止めようって言ったら此处に閉じ込められた。おいちゃんも同じだよ」

ジュニアは悲しみと諦めの入り混じった顔で天井を仰いだ。

「ボクは……その本の主人公みたいに英雄になりたかった。でも、ダメだった。ボクは弱いし汚れた人間だったんだ」

男は妙に苛ついた。ガキのくせに達観しているのが気に入らない。

「そうだな。お前は汚れてひ弱なクソガキだ。それで、これからは？」

「えっ これからって？」

「これからの、未来の事だ。懺悔は終わった。次は贖罪だ。己の心に許しを乞えよ」

男は悩みこむジュニアに目もくれず自己嫌悪に陥った。

死ぬ人間が何を偉そうに語っているのか。馬鹿馬鹿しいぜ。クソツタレめ。

己に悪態をつき男は気づいた。アマタから貰った銃が無い。慌てて周りを見る時、ガチャリとドアの鍵を開ける音が聞こえた。

「マズイよ。父さんたちだ。お兄さんを捌くつもりだ」

どうでもよかった。捌かれようが、挽き肉にされようがこんな世界から早く連れ去って欲しかった。

階段を降りてきたのは四人の男女。

「ほう、生きていたのか。これは捌き甲斐があるな」

銃把を切って短くしたソードオフショットガンを持った男とマグナム銃を持った男。女二人はナイフを持っている。マグナム銃を持った男が銃口を向けてくる。今度こそ終わりだと笑った。その瞬間ジュニアがマグナム銃を持った男に跳びかかった。続いてハリスがショットガンを持った男に跳びかかった。

予想外の反撃に面食らった二人の男は銃爪を引いてしまった。

マグナム銃はジュニアの胸を貫きショットガンはハリスの片腕を吹き飛ばした。

その光景を見たVaultの男は咄嗟に肉切り包丁を取りマグナム銃の男の頭をかち割った。そしてマグナム銃を拾い茫然自失の男の頭を吹き飛ばし間髪をいれず女の心臓を撃ち抜いた。残りの女はナイフで首を切り裂いて殺し、ようやく気付いた。

何故殺したのか自分でも分からない。混乱した頭で倒れているジュニアのもとへ向かう。

「……………」

何か喋っているが聞こえない。耳をジュニアの口元に近づけてようやく聞き取れた。

「……………ぼく、は、えいゆ、なれ、ない、けど、えいゆ、の、たすけには、なれた、よ、ね？」

「馬鹿な！　僕は断じて英雄なんかじゃない！　絶対に違う！
ただVaultの住人だったただけだ！」

男の叫びも虚しくジュニアはただ笑う。誇らしげに、やり遂げた男の顔で息を引き取った。

「ふふっ ジュニアめ。男になりおったわ。なあ、あんた。そのマグナム銃をわしに出来ないかの？ それはわしが息子に送った銃でな」

「……ほらよ」

銃を渡し男は外へ向かう。その手には一冊の本がにぎられていた。その背をハリスが呼び止めた

「旅人さん、あんたは、英雄じゃなかったのじゃろう。だが、これからは？」

男は何も答えず地下室を出た。盗られた銃を取り戻し、家から出ると女の子が一人いた。ジェニーという名の少女はジュニアと違い何も知らないのだろう。そしてきつと知るべきじゃない。

男はジェニーを半ば強引に連れてアンデルを出た。

得たものは一冊の本と妙な道連れのみだが、不思議と世界が色を取り戻した。

右手でアマタの銃を握り頭に突き付けて銃爪を引く。

キンツと音がしてマガジンに弾が入ってない事に男は気づき苦笑いを浮かべ歩を進める。

生きてみようか……失ったモノは多い。だけど、得られたモノも確かにある。だからもう少しだけ

遠く背後のアンデルの町から一発の銃声が聴こえた。アンデルの終わりを告げる音は低く、重く、だがどこか晴れやかに響き渡る。アンデルの町が滅んだ日、英雄は生まれた。

「それで……君は英雄になれたのか？」

「さあね、最初は本の英雄の物真似をしてたが段々と自分のルールに従うようになったし。ただ」

孝は冴子をしつかりと抱きしめて天井を仰いだ。

「あの日が無ければ俺はきっとここにはいない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7503n/>

学園黙示録～Fallout OF THE DEAD～

2011年2月19日12時46分発行